

中近世移行期松島高城地域史の研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-04-26 キーワード (Ja): キーワード (En): Tohoku Gakuin University 作成者: 竹井, 英文 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24561

中近世移行期松島高城地域史の研究

竹井英文

はじめに

本稿は、中近世移行期の松島地域、なかでも瑞巖寺や五大堂、雄島などがある松島中心部（近世の松島村に相当。以下「松島」とする）の隣に位置する高城地域（近世の高城本郷周辺）に注目し、地域史の研究を行うものである。

中近世移行期の研究はさまざまな視角から進められているが、学際的な研究方法による地域史の研究は、一つの重要な研究潮流になっているといえよう。この時期は、拠点城館・都市の移転、幹線道路の変化・付け替え、大規模な治水事業などがしばしば起き、地域の姿が大きく変化していく時期である。そのため、さまざまな史料や遺跡をもとに個々の地域の構造・景観を復元しつつ、それが中世から近世にかけていかなる変化を遂げていったのかを明らかにしていくことにより、具体的な地域のレベルから変革期としての当該期社会を捉え直そうとしているといえよう。

そうした研究自体は、一九八〇年代頃から積み重ねられている

が、近年は各方法論に基づく研究が精緻化し、より詳細な地域構造の復元が進められるとともに、個々の地域にのみ注目するのではなく、より広域的な地域構造との関係からダイナミックにその変容のあり方を明らかにする研究が登場してきている^①。研究の現状としては、こうした研究動向を踏まえながら、さらに事例検討を積み重ねていくべき段階にあるろう。

こうした点から東北地方の中近世移行期研究の現状をみると、地域史研究はあまり進展していないといわざるをえない。そもそも、研究の前提となる史料の収集・公開が関東地方などと比べると大きく遅れており、個々の領主の動向を中心とした基本的な政治史の研究すら検討の余地が多く残されている。むしろ、そのなかでも特に考古学を中心に、これまでも中世段階を中心^②にさまざまな優れた関連研究が行われているものの、^③ 広大な東北地方においては未解明な部分が非常に多く残されているといえよう。

このような問題意識のもと、前稿にて筆者は陸奥府中の一角である利府地域（宮城県利府町）の研究を不十分ながら行ったが^④、本稿では利府地域に隣接し、一大霊場として全国的にも著名な松島地域

に注目して、中近世移行期の地域史研究をさらに進めたい。

松島の地域史については、『松島町誌』⁽⁴⁾や『松島町史』⁽⁵⁾において概説され、現時点でも基本文献の一つとなっている⁽⁶⁾。また、円福寺や雄島を中心とした中世の一大霊場としての「松島」については、文献史料や発掘調査、板碑などの石造物を駆使した学際的な研究が進み、中世の景観復元も進められるなど、多くの研究が蓄積されていることは今更いまでもない⁽⁷⁾。ただし、本稿の対象時期である中近世移行期の松島地域についての検討は、必ずしも深められていないのが現状である。

松島地域を研究するうえでも注目したいのが、「松島」に隣接する高城本郷を中心とした高城地域である。後述するように主として武家領主が支配した地域であり、中世城館が集中して存在するなど、実は松島地域の歴史を考えるうえで外せない地域であるが、研究は手薄な状況である。松島地域の研究を進展させるためには、高城地域を含めて総体的に研究を行う必要がある。

以上のことを踏まえ、本稿では特に高城地域に注目して、その構造を復元しつつ、近世初期の高城宿を中心とした構造への変容過程を、可能な限り明らかにしていきたい。

(註1) 関連研究は多岐にわたるが、単行本として刊行されている代表的なものとして、仁木宏・松尾信裕編『信長の城下町』(高志書院、二〇〇八年)、齋藤慎一『中世東国の道と城館』(東京大学出版会、二〇一〇年)、石井伸夫・仁木宏編『守護所・戦国城下町の構造と社会——阿波国勝瑞——』(思文閣出版、二〇一七年)などが挙げられる。歴

史地理学の観点からは山村亜希『中世都市の空間構造』(吉川弘文館、二〇〇九年)などが、近年の個別城郭を中心とした研究としては『葦山城跡「百年の計」きわめる・つたえる・いかす 郷土の誇り』(静岡県伊豆の国市、二〇一四年)、『吾檀城跡総合調査報告書』(群馬県東吾妻町教育委員会、二〇一八年)などが挙げられる。また、地域史研究を取り巻く状況・課題については、市村高男『科学運動と地域史認識』(歴史科学協議会編『歴史学が挑んだ課題』大月書店、二〇一七年)が重要である。

(註2) 東北地方をフィールドとした代表的な研究としては、東北中世考古学会の一連の活動(同編『遺跡と景観』高志書院、二〇〇三年。同編『海と城の中世』高志書院、二〇〇五年など)や、岡田清一『中世南奥羽の地域諸相』(汲古書院、二〇一九年)、山村亜希『中近世移行期における地域構造の変化と港町の景観——出羽酒田を事例として——』(金田章裕編『景観史と歴史地理学』吉川弘文館、二〇一八年)、『武家拠点科研』青森・南部研究会資料集 東北地方北部における武家拠点の形成と変容(聖寿寺館を中心に)。(武家拠点科研事務局、二〇一九年)、田中則和『南三陸の山城と石塔 東日本大震災後の調査でわかったこと』(河北選書、二〇一八年)などが挙げられる。

(註3) 拙稿「中近世移行期利府地域史の研究」(『東北学院大学東北文化研究所紀要』第五〇号、二〇一八年)。
(註4) 『松島町誌』(松島町、一九六〇年。第二版、一九七三年)。本稿では第二版を使用する。以下、『町誌』と略す。
(註5) 『松島町史』通史編I(松島町、一九九一年)。以下、通史編Iは『町史』と略す。それ以外は『町史』〇〇と略す。

(註6) このほか、『松島町歴史文化基本構想』(松島町教育委員会、二〇一八年)でも、『町誌』『町史』の内容をベースに、地域の歴史を改めて概説している。

(註7) 入間田宣夫『中世の松島寺』(渡辺信夫編『宮城の研究』三、清文堂、一九八三年)、同『古代・中世の松島寺』(『町史』通史編二、一九九一年)、入間田宣夫・大石直正編『よみがえる中世七 みちのくの都

多賀城・松島〔平凡社、一九九二年〕、堀野宗俊『瑞巖寺の歴史（瑞巖寺、一九九七年）、七海雅人①「鎌倉・南北朝時代の松島」（入間田宜夫編『東北中世史の研究』下巻、高志書院、二〇〇五年）、同②「霊場松島の様相——基礎的事項の確認——」（新野一浩『瑞巖寺境内遺跡とその周辺』（いずれも東北中世考古学会編『東北中世考古学叢書五 中世の聖地・霊場』在地霊場論の課題）、高志書院、二〇〇六年）、新野一浩・七海雅人「松島町雄島周辺海底採集板碑の報告（一）～（三）」（東北学院大学東北文化研究所紀要 第四四～四六号、二〇一三～一五年）など。

第一章 中近世の松島高城地域の概要

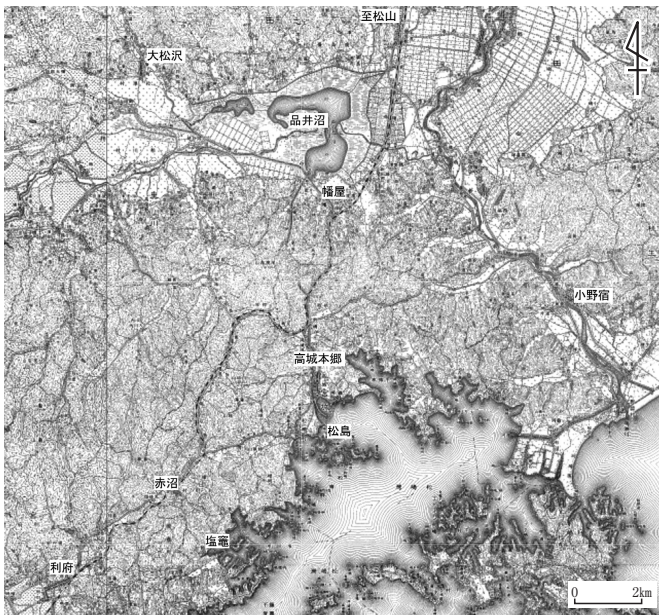
本章では、中世から近世初頭の松島地域についての概略を述べ、残された課題を明確にしたい。

松島町は宮城県宮城郡に属し、東を東松島市、北を大崎市、北西を黒川郡大郷町、南西を宮城郡利府町に囲まれた地域である。北東部は品井沼低地や鳴瀬川、南部は松島湾に面しており、西部は松島丘陵となつて、その末端の丘陵が広く町域を囲んでいる。

町の中心部「松島」を囲み、さらに北東方向へ展開する地域が、本稿がフィールドとする高城地域である。その中心部である高城本郷付近は、東は松島丘陵の残丘である愛宕山や、そこから南東方向に続く迎山、西から南にかけては白坂山や高山などをピークとした松島丘陵に囲まれ、中心部を南北に高城川が流れており、高城川河口付近で松島湾に面している。

高城地域は、古代・中世においては高城保という国衙領であり、

現在の松島町と利府町の一部に広がっていた。早くから相馬氏が地頭職に任じられ、鎌倉から室町初期にかけて保内に所領を有していた。相馬氏関係の諸史料から、保内には赤沼郷・波多谷（幡屋・幡谷）村・長田村（近世の磯崎村・高城本郷の範囲）・根崎村（近世の根廻村の一部）・鶴原（初原）村があったことが確認できるが、「松島」は独立した単位所領とされ、含まれていなかった可能性が高い。⁸⁾



【図1】：松島高城地域周辺地図

（この地図は、時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」（C）谷 謙二）により作成したものです。1/50000 「松島」大正元年測図の地図に加筆

近世になると、高城保は宮城郡高城郷十三邑として再編され、「松島」も含まれるようになったが、おおむね高城保の範囲と重なっている。宮城郡の北方郡奉行の管轄下にあり、高城本郷には石巻街道の一大宿場町である高城宿が設置され、代官所も置かれた。高城本郷は、南西側を松島第一小学校付近の蛇ヶ崎を境として松島村と、東側を磯崎村と、北側を根廻村・初原村と、西側を桜渡戸村と接していた。さらに北側の山間部には、幡屋村や小泉村が、東側の海沿いには手樽村がある。なかでも磯崎村は、仙台藩の藩米取り扱い所である磯崎御蔵が置かれ、廻米廻船の港、松島の海の玄関口として大いに栄えていた。また、磯崎に隣接する高城川の河口部には、仙台藩の塩田である高城塩田も広がっていた。

中世の「松島」のなかでもっとも研究が進んでいるのは、各種史料が豊富な鎌倉〜室町期であるが、本稿で注目する高城地域の研究も、この時期にまとまって相馬氏関係の史料が残されているため、同様の状況である。

先述したように、鎌倉期から相馬氏が高城保内諸村の地頭職に任じられていた。永仁二年（一二九四）の「御配分系図」によると、当時の当主相馬胤村の所領は九人の子に分割されていた。⁹⁾このうち、胤村の長氏胤氏は下総国の嫡流となり、師胤の家系が陸奥相馬惣領家、胤頭の家系が岡田家、通胤の家系が大悲山家となった。鎌倉期においては、惣領家は高城保に所領を有していなかったようで、胤氏が赤沼郷に、胤頭が赤沼郷と波多谷村に、通胤が長田村に、胤村の女子が根崎村・鶴原（初原）村に、それぞれ所領を有していた。

これらは室町期にかけて多少変化し、また他の氏族も所領を有していた可能性があるが、高城保内の大部分は相馬氏領であったと考えられている。一方、「松島」に相馬氏の所領があった痕跡はない。

高城保には、近隣の奥州一宮塩竈神社領も古くから存在していた。高城保は、隣接する「松島」よりも塩竈神社や陸奥国府との関係から捉えられる側面が強いとの指摘もある。¹⁰⁾その塩竈神社と深い関係にあるのが、留守氏である。留守氏は、代々塩竈神社の神職でもあったことが知られ、社領支配を通じて主に南北朝期以降、高城保へ勢力を伸ばしていったようである。また、「松島」にも、鎌倉期から留守氏関係者の板碑が多々見られることが知られている。

南北朝期になると、松島地域もたびたび合戦の舞台となった。応安六・七年（一三七三・七四）頃には長田村で合戦が起き、吉良貞経方と畠山国詮方との対立のなかで、国詮が「長田の城」にて籠城戦を展開している。こうした戦乱状況のなか、相馬氏も一族の分裂や惣領が一時行方不明となるなど、さまざまな困難に直面したが、高城保の所領を失うことはなかった。十五世紀初頭にかけて、惣領家は赤沼郷・長田村を、岡田家は波多谷村を所領としていたことが確認できる。ところが、応永九年（一四〇二）の相馬胤久讓状〔表〕No.1を最後に、高城保から相馬氏の姿は見られなくなる。相馬氏の本拠は行方郡であり、戦乱状況により遠方の所領である高城保の維持が困難になったためと思われるが、その背景には分割相続から嫡子単独相続への変化とともに、留守氏の進出があったのではないかと推測されている。

【表】中近世移行期の松島高城地域関係史料一覧

番号	文書名	年月日	西暦	宛所	内容	出典(文書)	出典(史料集)	備考
1	相馬胤久議状	応永9年5月14日	14020514			相馬岡田文書	『仙中』編年213号	
2	旦那注文	応永26年8月27日	14190827	那智山御師中かり屋の式部殿	奥州たかきの保の内あらぬまの郷住人	米良文書	『仙中』編年216号	
3	奥州余日記録	永享年間(1429~41)頃			竹城保宮沢大和入郎とて有、其在城せめおとし	余日家文書	『仙中』余日家文書16号(p240上段)	「奥州余日記録」自体は永正11年成立
4	おくの二脚兵衛借銭証文	康正3年4月24日	14570424	しつほういん(実報院)	又おうしうまつしまへーあん二人申候	米良文書	『仙中』編年219号	
5	聖護院役者増頁書状	(文明年間か) 8月28日	14690828	大祥院	如何縁松嶋平泉為見物、与風可下国候間	青山文書	『福島県史』第7巻、577頁	
6	廻国雜記	(文明19年)	14870000		おくのほそ道、松本、もろおか、あかぬま、西行かへりなどいふ所をうち過て松嶋にいたりぬ		『町史』資料編Ⅱ、16頁	
7	伊達尚宗宛行状取意文	明応4年5月22日	14950522	宮沢又六	竹城保根嶋郷内云々	『伊達正統世次考』巻七	『仙中』編年239号	
8	陸奥国旦那証文日録写	15世紀末頃			一、宮城 国分 八幡 松島郷	米良文書	『仙中』編年263号	
9	諸国旦那帳	年未詳(8と同時期か)			一、宮城の内人わた一門 一、松島 奥州松島一門五郎三郎殿・山城殿河人へ	米良文書	『石巻の歴史』第8巻、230号	年代推定は「原町市史」第4巻による
10	佐藤次郎五郎旦那宛券	明応10年3月20日	15010320			米良文書	『仙中』編年262号	
11	御段錢古帳写	天文7年9月3日	15380903			伊達家文書	『桑折町史』第5巻、227号	
12	留守景宗恩賞宛行状写	天文10年3月2日	15410302	高橋殿 辺見殿	松島村二而千五百町宛行	須田系図	『仙中』編年288号	要検討
13	伊達頼宗判物取意文	天文13年間11月28日	15441128	宮沢越前	一、高城 八十五町文…高城 一、八十五貫文、十七町千五百町り	『伊達正統世次考』巻九上	『梁川町史』第5巻、550頁	
14	伊達頼宗判物取意文	天文14年11月2日	15451102	壱岐豊後	高城郷内高藤分	『伊達正統世次考』巻九上	『梁川町史』第5巻、565頁	
15	伊達則宗判物	天文16年12月20日	15471220	長江助九郎殿	去年於立馬於長田之時	三分一所文書	『古川市史』第7巻、331号	
16	寺家杜家之日記写	天文10年代か			何も高城之内之地、永代進候也	伊達家文書	『仙中』編年319号	「留守分限帳」と一連のものか。
17	飛島井雅教書状	(永祿5年か) 5日	15620005	左京大夫殿 申給	一、松島山寺ふん十二坊…一、松島寺分御ミヤの御神りよ	伊達家文書	『宮城県史』30、590号	
18	留守政景手日記	(永祿10~天正18年)12月27日		塩竈 参	松島見物候ハ、急可罷上候条	塩竈神社文書	『仙中』編年319号	
19	伊達頼宗書状写	(永祿12年) 閏5月12日	15690512	余日伊勢守殿(ほか)	一、松しま・やわたの衆徒中、もんとの事二候	留守家文書	『仙中』留守家文書19号	
20	高城宗綱書状写	(永祿12年か) 6月2日	15690602	謹上 牧野彈正忠殿	宮城孫五郎縁約付、菟角之儀其間候	伊達家文書	『仙中』編年334号。『伊達家文書』171号	
21	堯雅僧正関東下向記	元龜2年5月24日	15710524		将亦先度於于北目、大町宮内少輔殿淵底之趣	三宝院文書	『仙中』編年344号	

番号	文書名	年月日	西暦	宛所	内容	出典(文書)	出典(史料集)	備考
22	田村顕広月斎書状	(天正2年以前)10月27日	15741202	三榮齋 御報	松嶋平泉御一覽路次中、不可有相違候 たかきよりのたか参候、又はせくらよ りたか参候	青山文書 伊達家文書	『福島県史』第7巻、592頁 『伊』292号(381頁)	「たかき」=高城か
23	伊達輝宗日記	天正2年12月2日	15741202					
24	伊達輝宗日記	天正2年12月16日	15741216		たかきよりのたかたはなし、きし二参 候	伊達家文書	『伊』292号(383頁)	「たかき」=高城か
25	伊達輝宗日記	天正2年12月19日	15741219		たかき大たかにて、きし二合而参候	伊達家文書	『伊』292号(383頁)	「たかき」=高城か
26	留守政景所役免状	天正6年8月12日	15780812	円福寺実堂和高江 参	今度圓福寺候、実堂和尚尊意依御座 候、	瑞巖寺文書	『仙中』編年379号	
27	白河義規不説書状	(天正10年)4月9日	15820409	遠藤山城守殿	将又村松式部丞松嶋為一見令下向候	遠藤家文書	『伊達氏重臣 遠藤家文書 中島家文書～戦国編～』25号	
28	伊達政宗書状	(天正16年)2月28日	15880228	片小	松山・大まつさハ、たかきもちかね 候て	留守家文書	『仙伊』205号	
29	伊達政宗書状写	(天正16年)2月28日	15880228	高城式部少輔殿	各龍城引除候	『引証記』三	『仙伊』206号	
30	伊達天正日記	(天正16年)8月27日	15880827		たかき殿参御申候	伊達家文書	『仙中』編年476号	
31	伊達天正日記	(天正16年)9月27日	15880927		たかきより若大鷹上被申候	伊達家文書	『仙中』編年482号	
32	伊達天正日記	(天正16年)9月28日	15880928		遠藤わかきニ高城より参候大鷹あつけ させられ候	伊達家文書	『伊達史料集』下、310頁	
33	伊達政宗書状写	(天正17年)4月20日	15890420	旧拙齋 太宮	又ハ高城なども可然候哉	『引証記』八	『仙伊』410号	
34	葛西晴信書状	天正18年7月29日	15900729	本吉大龍郷 須藤 伊豆守殿	今度和府表出張之所、盛重以下松島高 木郷出張之由	大龍首藤文書	『岩手県戦国期文書』2、 109号	要検討
35	伊達政宗書状写	(天正19年)3月5日	15910305	高城固防守殿 同 式部少輔殿ほか	上洛ニ付而、遠路之脚力本望候	『引証記』十五	『仙伊』822号	
36	伊達政宗書状	(天正19年)6月1日	15910601	高城式部少輔殿 官沢左衛門尉殿	急更啓之候、其表へ出馬	高城文書	『仙伊』835号	
37	奥州高城御射打水帳	天正19年9月2日	15910902		てたるの村 長田之村	伊達家文書	『宮城県史』第30巻、279～ 93頁	
38	伊達政宗印判状写	天正20年11月10日	15921110	与五浦	一、ゆりあげ、一、かはさき、一、し ほ壺、一、いせ崎	木村(信二)家文書	『仙伊』924号	
39	葛西大崎船止日記	慶長5年8月10日	16000810		一、たかき…一、同もつは はつはら の内	伊達家文書	『伊』678号	「たかき」=色麻町高 城か
40	漆浦取日記	慶長5年10月5日	16001005		一、国分中 一、ミヤキ中 一、高城 中 一、ふかや中	伊達家文書	『伊』679号	
41	山岡重長以下人教書	慶長5年11月17日	16001117	草刈ないせん他	一、湯村信濃守 宮城・黒川・高城 佐瀬助右衛門尉	伊達家文書	『伊』680号	
42	伊達政宗黒印状	慶長7年2月28日	16020228	茂庭石見とのへ 湯村信濃とのへ	然者宗是御知行俵物、如去年磯崎ニ 前、可有御座にて候	個人藏	『仙伊』1178号	

番号	文書名	年月日	西暦	宛所	内容	出典(文書)	出典(史料集)	備考
43	五大堂棟札	慶長9年12月6日	16041206	正栄寺	大權趣正四位上少将伊達越前守藤原朝臣政宗 いそさき 豊前守	五大堂所蔵 正栄寺文書	『阿史』資料編1、596頁 『市史せんたい』vol121、政宗文書補遺49号	
44	伊達政宗黒印状	慶長10年9月26日	16050926	正栄寺				
45	瑞巖寺鐘銘	慶長10年10月	16051000	瑞巖寺	抑大權趣黄門侍郎伊達藤原政宗公 松島へ十三日之夜半過分参候て	瑞巖寺所蔵 加藤秀一氏所蔵文書	『阿史』資料編1、581頁 『市史せんたい』vol128、政宗文書補遺314号	
46	伊達政宗書状	(慶長10年代初め～半ばカ)	16050000					
47	伊達政宗消息	(慶長10年代から元和初期頃)12日	16050021	正益老	十五日比、松島へ慰に参候	秋田家文書	『仙伊』3844号	
48	伊達政宗黒印状写	慶長13年8月4日	16080804		伝馬五疋 仙台の高城迄上下	須江家文書	『仙伊』1285号	
49	松島瑞巖輝寺棟札	慶弔14年3月28日	16090326		大權趣奥州刺史伊達少将藤原政宗朝臣建徳 伊達少将藤原政宗朝臣、自従紀州熊野山取具材	瑞巖寺所蔵 瑞巖寺所蔵	『阿史』資料編1、592頁 『阿史』資料編1、540頁	
50	松島才丈記 扁額	慶長15年1月	16100100					
51	ビスカイノ金銀島探検報告	慶長16年11月17日	16111117		同夜は松島に到りて夜を過し、寺即ち当国民の教会又は堂を觀たり		異国叢書『ト・ン・ロドリゴ日本見聞録：ビスカイノ金銀島探検報告』金銀島探検報告102頁	
52	伊達政宗伝馬黒印状	慶長17年9月14日	16120914		仙台からはらの町、りふ、高城、ふかや	北海道開拓記念館所蔵斉藤家文書	『仙伊』1329号	
53	伊達政宗覚書	(慶長19年)	16140000		一、松島二立候寺之事	亙理家文書	『仙伊』1602号	
54	伊達政宗消息	(慶長末から元和初期)	16150000		松島見物に江戸のくたり候人	亙理家文書(影写本)	『仙伊』1871号	
55	瑞巖寺鐘銘	元和4年	16180000		元和四年戊午 仙台宰相	瑞巖寺所蔵	『阿史』資料編1、581頁	
56	伊達政宗書状案	(元和6年)7月11日	16200711	石和州 御報	今日者松島瑞巖寺二用等候而	『引証記』二十八	『仙伊』2195号	
57	伊達政宗書状	(元和7年カ)4月11日	16210411	了庵	松浜分松島へ海上卅里余	茂庭文書	『仙伊』2269号	
58	伊達政宗山道人教書	元和9年1月13日	16230113		八番 高城中 一、八拾四人 廿人 向廿五人 向人手前	伊達家文書	『大日本古文書』伊達家文書』847号	
59	中島監物・石母田大膳連署状写	寛永6年2月23日	16290223	清野□□殿ほか	高城之内磯崎浜中田地付而	石母田家文書	『仙台藩重臣 石母田家文書』340号	
60	中島監物・石母田大膳連署状写	寛永6年2月23日	16290223	郡山次左衛門殿 小島弥兵衛殿	高城之内深谷之内宮戸磯崎浜中…磯崎浜中当年分	石母田家文書	『仙台藩重臣 石母田家文書』341号	
61	中島監物・和田主水連署奉書	寛永9年7月3日	16320703	石母田大膳殿 田吉助殿	一、磯崎野原十三郎二、為御切米本錢七百文	伊達家文書	『仙伊』参考90号	
62	伊達政宗書状	寛永12年8月カ13日	16350813	奥山大学殿	明後十五松島へ打越候…十六日者松島海邊可届候	奥山家文書	『仙伊』3370号	
63	伊達領内領如日記	(近世初頭カ)			高城之内 一、櫻渡戸 松岡あけ地	伊達家文書	『伊』1236号	

凡例：『阿史』…『松島町史』

『仙中』…『仙台市史』

資料編1 古代中世

『仙伊』…『仙台市史』資料編10～13 伊達政宗文書1～4

『伊』…『大日本古文書 伊達家文書』

相馬氏が撤退してから後、十五世紀前半から十六世紀前半の研究は、非常に少ない。『町誌』・『町史』では、相馬氏に代わって留守氏の勢力が拡大した時期とみならず、叙述は少なく、各種地名辞典や関連研究でも部分的に触れられる程度である。この頃は、円福寺の勢力が衰退していく時期であることから、「松島」に関する研究も極めて少ない。そのため、一気に戦国後期の十六世紀後半に飛び、その頃に突如として登場する高城氏という氏族が主として検討されてきた。なかでも、留守氏出身で伊達政宗に仕えた高城宗綱は比較的著名であり、天正十六年（一五八八）の大崎合戦や同十八年の奥羽仕置で活躍していたことが知られている。しかし、そもそも高城氏という氏族自体不明瞭な点が多く、宗綱についても具体的な検討は少ない。また、「松島」についても、天正六年の留守政景判物〔表〕No.26）がほぼ唯一の史料として検討され、政景が円福寺の諸役の免除をしていること、政景が円福寺の大檀那であったこと、留守氏が「松島」を所領としていた可能性があることなどが指摘されている程度である。

その後の奥羽仕置から十七世紀初頭にかけての時期については、これまで以上にほとんど研究らしい研究がない。後述する天正十九年九月に作成された検地帳である「奥州高城御棹打水帳」〔表〕No.37）についての検討や、慶長期の伊達政宗による五大堂の修復・瑞巖寺の建立に関する叙述くらいである。この時期は、時代区分の境目に位置することもあり、全国的にも研究が手薄な時期といえる。

『町誌』・『町史』でも、近世の叙述は仙台藩政に関するものがメイ

ンとなってしまっており、まさに空白期間となっている。

以上、中世から近世初頭の松島高城地域について簡単に概観した。鎌倉～室町初期については比較的研究蓄積があり、基本的な事実関係が判明しているものの、室町初期から近世初頭については研究蓄積が少なく、不明瞭な点が数多く残されているといえよう。なかでも本稿が重要な課題として考えているのは、①相馬氏が高城保から撤退した後、②十六世紀前半から十六世紀前半の状況が不明瞭であること、③十六世紀後半には高城地域を支配していた高城氏の出自・動向が不明瞭であること、④十六世紀末から十七世紀初頭の状況がほとんど検討されていないこと、の三点である。この三点を中心に、以下具体的に検討していきたい。

〔註8〕 前掲注（7）七海論文②。

〔註9〕 「相馬一族所領配分系図」〔仙台市史〕資料編「古代中世以下」仙中」と略す。編年九〇号、相馬文書。

〔註10〕 前掲注（7）七海論文②。

第二章 中世高城地域の空間構造

（1）中世高城地域の地形

具体的な検討に入る前に、本章ではその前提として、戦国期を中心とした中世段階における高城地域の空間構造について考えたい。

実は高城地域は、近世以降の開発によって大きく変貌を遂げている。

そのため、可能な限り中世段階の景観を復元することが、地域史研究のためには必要である。

まずは、当時の地形である。「松島」の中世段階の地形については、すでに新野一浩氏により復元案が提示されている¹¹⁾。江戸期の地誌である『塩松勝譜』の記述や「浜」「浦」などの地名をもとに、海岸線の基準を標高二m付近に設定しているが、現在の中心部の大部分が海なしし低湿地であったようである。つまり、「松島」と高城地域の中心部との間は海なしし低湿地であり、両地域は近世以降のよくな海岸沿いの街道で結ばれていなかった可能性が高くなる。

一方の高城地域については、そもそも明治期の時点で、高城川の河口部や現在の磯崎漁港付近は海であったことが古地図からも明白である。また、現在中心部を南北に流れる高城川は、幡屋村の北側に宮城・黒川・志田三郡にまたがって存在した品井沼が、元禄年間から干拓されたことにもない、人工的に作られた疎水としての川であることに注意したい。

では、中世には高城川が存在しなかったのかというと、そうではない。正和二年(一一三三)の文書に「竹城河」が登場するためである¹²⁾。その具体的な姿は不明であるが、地形・地質・伝承などから、赤沼郷を源とし桜渡戸村・初原村を過ぎて流れる田中川(上流は桜川と呼ばれる)が、根廻村の新橋方面から流れていた水流と愛宕山麓の愛宕橋付近で合流し、そこから少し南下した西柳付近から迎山の丘陵部の裾(高城宿の北側)に沿って東南方向へ流れ、海に注いでいたと考えられている。正保年間(一六四四~四八)に作成

された「奥州仙台領国絵図」にも描かれていないため、小規模な川だったのだろう。上記のような流路から、近世高城本郷の大部分は中世「竹城河」の右岸に位置し、浅海なしし低湿地が広がっていたと考えられている。

次に、当時の海岸線だが、近世段階よりさらに内陸へ伸びていたものと思われる。特に中世前半段階では、西北は紫神社・龍沢寺付近の居網地区、北は愛宕山麓付近まで入り江や低湿地だったと推定されている¹³⁾。先述した「松島」の推定海岸線も踏まえると、相当程度海が内陸部に入り込んでおり、近世以降の景観とは大きく異なっていたものと思われる。

(註11) 前掲注(7) 新野論文。

(註12) 「相馬通胤讓状」(「仙中」編年九七号、大悲山文書)。

(註13) 『町誌』九三頁など。

(註14) このうち、「居網」地名の由来は「古此処海湾ニシテ潮汐此地ヲ来去シ、居ナカラ魚網ヲ投ス故」古皆海濱タリ、潮水来去ス、此ノ処ニ居テ而シテ魚網ヲ投ス」とされる(『仙臺叢書別集第四卷 塩松勝譜』八七・二二二頁)。また、いつ頃の話か不明だが、白魚がよく取れたことから「居網の白魚」として地元では有名であったという(『町誌』四四九・四六七頁)。

(2) 寺社・石造物

【図2】は、中世から近世初頭(と考えられる)の寺社・石造物・町場・城館などを大正期の地図上に落としたものである。高城地域では中世遺跡の発掘調査事例がほとんどなく、近世の地誌類の記述



【図2】：中近世松島高城地域の空間構造

(この地図は、時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」((C)谷 謙二)により作成したものです。1/50000 「松島」大正元年測図の地図に加筆

などをもとに考えざるをえないことを断っておく。

まずは、寺社である。高城本郷の紫神社の由来は諸説あるが、『義経記』に登場するため、少なくとも室町期以前には存在していたことが確実である。現在は、高城本郷の城内山城跡の南斜面に鎮座するが、もとは蛇ヶ崎の梨木平というところにあった。慶長期に蛇ヶ崎は仙台藩重臣の山岡重長の屋敷地となったが、山岡家の没落後に高城に帰農した家臣たちが現在地に移したとされる。なお、高城本郷の帰命院は、山岡重長が慶長期に建立したとされる。

曹洞宗龍沢寺は、天文二十二年（一五五三）に開山（弘治元年八一五五〇説も）とされ、戦国期に遡る可能性がある寺院である。龍沢寺の向かい側には、高城氏の菩提寺・延命院がかつて存在したとされる。『桃生郡誌』によれば、慶長三年（一五九八）に高城宗綱が建立したという。高城氏は、宗綱の子宗直が慶長七年に磐井郡折壁（岩手県一関市）、さらに宗直の智養子である直吉が寛永十三年（一六三六）に桃生郡小船越（宮城県石巻市）へ移封されたが、それに従って移転し、現在も小船越に存在している。¹⁵⁾

龍沢寺からさらに西、居網地区の奥には永禄年間創建とされる白坂不動があり、大日山館の北側・小森にある臨済宗長慶寺も、一説では嘉暦二年（一三二七）に円福寺十世明極聰愚の開山とされている。

磯崎村にある龍沢寺の末寺・曹洞宗宝船寺は、永禄五年（一五六二）龍沢寺二世桂菴和尚の開山（元亀元年八一五七〇説、天正年間説も）といい、創建当初はやや東の長田地区（土樋谷の待井付近）

にあったという。願立寺は、大坂の陣の落人という磯崎豊前守が開山とされ、近世初頭に遡る可能性がある。初原村の初原天神社は、その由緒は不明だが、かつては久安元年（一一四五）六月二十五日銘の鰐口があった¹⁶というので、中世の早い段階から存在していた可能性がある。幡屋村の西光院は応永二年（一三九四）の開山、観音堂は永正年中（一五〇四～二一）に大友外記の創建とされている。

中世の石造物については、ほとんど確認されていない。わずかに『町誌』によれば、初原村の上初原に応永・嘉吉・文安などの年紀を持つ墓石の断碑がある¹⁷とい、またかつて高城本郷の西柳付近からも文明年号が刻まれた断碑が掘り起こされた¹⁸というが、いずれも現在は詳細不明である。

〔註15〕『桃生郡誌 全』（名著出版、一九七三年、二二二頁。原版は一九二三年）。なお、高城宗直は寛永十三年に仙台藩の蔵が焼失した責任を負い処罰されている（『仙台叢書 伊達世臣家譜』第一巻、第一輯一〇七頁（卷之四）、「仙台藩奉行衆連署状写」『仙台藩重臣 石母田家文書』五七〇号）。

〔註16〕『仙臺叢書別集第四卷 塩松勝譜』八八頁。

〔註17〕『町誌』五二七頁。

〔註18〕『町誌』四五三頁。

（3）集落・街道

高城地域の中世末期の集落の実態を知ることができる史料として、天正十九年九月の「奥州高城御棹打水帳」がある〔表 No.37〕。奥羽における太閤検地の一例として注目されてきた史料で、徳川家

康家臣の阿部善八郎により作成された。高城地域のうち、手樽村・長田村のものが残されており、貫高が採用され、分付記載もされているが、これは徳川氏の検地手法を採用したものである¹⁹。

これまでの研究では、手樽村では「宮内」なる人物が唯一の分付主で村内に屋敷を持つ最有力百姓であったこと、「宮内分」として複数の百姓がみえるが、いずれも「宮内」に隷属していた百姓ではなく、相当規模の田畠屋敷を持つ独立した百姓であったこと、長田村には数人の分付主有力百姓がいたが、村内に屋敷を持たないものも多かったこと、これらの百姓の名は武家的であるため土豪層だったと思われること、経営規模が大きい百姓が多く複合大家族が中心だった可能性が高いこと、などが指摘されている¹⁹。おそらく、周辺の村についても戦国末期の段階では同様の状況であり、戦国期の高城氏などもこうした土豪層を家臣化して支配していたのだろう。

また、同史料には、手樽村の船一艘に「永楽」二百文、長田村の船一艘に「永楽」一貫文、そして「はま年貢」五百文、「藻塩」十駄が税として立項されていることから、海運業や漁業・製塩業が展開していた様子がうかがわれる。おそらく、戦国期も同様の生業が展開し課税が行われていたことだろう。

このほか、『町誌』では、城内山城（神楯）の南麓（現在の紫神社や龍沢寺付近）に根小屋集落が存在し、西柳付近にも応仁・文明期頃から集落が発達したと想定しており、根小屋集落が次第に移転することによって、近世高城宿が誕生したと考えている²⁰。居網地区には、建武四年（一三三七）段階で相馬氏の「蒔田の屋敷」があっ

たようで、早くから集落が形成されていた可能性がある。また、近世高城宿は、北側から本町・中町・河原町に分かれているが、一番北側で西柳に隣接する本町は、その名の通り一番古い町場であった可能性が高い。なお、館山館下の根廻村にも根小屋集落の存在が想定されているが、その痕跡をうかがうことはできない。⁽²²⁾

もう一つ、近世に栄えた磯崎について、『町誌』では鎌倉期からすでに相当の集落が形成されていたのではないかとしているが、伝承による推測止まりである。⁽²³⁾

次に街道である。近世の主要街道は、石巻街道である。利府から赤沼郷・長老坂を経て「松島」に出て、そこから蛇ヶ崎を越えて高城宿へと至る。高城宿からは一ノ渡・左坂を越えて東に向かい、小野宿、矢本宿（宮城県東松島市）などを經由して石巻方面へ至っていた。左坂からは、松山・涌谷方面へ続く松山涌谷街道も分岐していた。高城宿からは、さらに初原を經由して黒川郡吉岡（同大和町）方面へと通じる吉岡街道も分岐しており、吉岡街道の途中から黒川郡大松沢（同大郷町）方面へ分岐する街道もあった。このように、高城地域はまさに交通の要衝であり、近世においてはこれら諸地域と密接な交流があったことが知られている。

中世段階の街道については不明な点が多い。ただ、近世の街道が繋ぐ地域は中世においても各地の領主の本拠となっていたところが多いことからして、大局的には同様の道筋であったと思われる。特に、利府―赤沼―長老坂―「松島」という道筋は、諸史料から中世段階でもほぼ同様であったことが確認できるし〔表〕No.6など）、

先述した初原村の鰐口銘や石造物の存在から、吉岡街道の道筋の一部も中世段階に遡るといえよう。

問題は、「松島」―近世高城宿付近の道筋である。先述した周辺の推定地形を踏まえると、近世石巻街道の道筋そのままに考えることは困難であろう。この点に関して、『町誌』では根拠は示していないが、新富山下の旧道から高山下の山際を通り、山ごしに一ノ渡・左坂へ至っていたとしている。⁽²⁴⁾ たしかに、近世石巻街道の道筋は突如として成立したものでないはずなので、特に中世末期ではそれに近い道筋が成立していた可能性は高い。

そのうえでさらに注目したいのが、『奥州名所図会』の「高城駅」の項に記載されている「古海道」である。そこには「多歌山の嶺より紫明神の山の後ろ 古の往還なりしと云、今海道は後世出し也」とある。⁽²⁵⁾ 「多歌山」は近世松島村と高城本郷の境にある高山（大佐野山）のことで、その嶺から紫神社の裏手方面へ通じる古道があり、石巻街道の道筋は後世に設定されたものというのである。「嶺」とあるので、山道なのだろうか。具体的な道筋はわかりにくいだが、古地図を参考にすると、長老坂の途中から分岐して湯ノ原、葉山神社、高山へ向かう尾根道があり、高山からは北側、つまりは紫神社・居網地区方面へ降りていく道筋があったようである。高山周辺には中世のものと思われる石塚や土壇がかつて存在したとされていることも、それを示唆しようか。⁽²⁶⁾

その先も不明瞭だが、紫神社付近から西柳や近世高城宿方面へそのまま出たか、あるいは明治期の古地図や『陸前国宮城郡地誌』な

などを参考にすると、紫神社や居網地区・白坂不動付近から西北の「城内山」（城内山城とは別の山）などの山間部を経て長慶寺・館山館下付近へ出たのかもしれない。⁽²⁷⁾ 推測に過ぎないものの、こうした海岸部を通らない山側の道が、中世段階の基本的道筋だった可能性を考えたい。⁽²⁸⁾

〔註19〕 谷口央「検地帳と権力」〔同「幕藩制成立期の社会政治史研究——検地と検地帳を中心に——』校倉書房、二〇一四年。初出二〇〇九年〕。

〔町誌〕一三二―三五頁。『町史』二六四―六七頁。

〔註20〕 『町誌』四五―三頁。

〔註21〕 「沙弥明円相馬行胤讓状」〔南北朝遺文 東北編〕三五一号、相馬胤道氏所蔵大悲山文書。

〔註22〕 なお、館山館は「反町館」と呼ばれ、実際に城下に「反町」という地名がある。城下集落の存在を想定したいところだが、柳田國男によれば、「ソリ」は焼畑を意味する言葉で、「町」は都市ではなく区画を意味することも多いという。加えて城下集落としての痕跡もないため、館山館とは無関係の地名と考える〔同「地名の研究」』柳田國男全集〕八、筑摩書房、一九九八年、四九一―四九四頁。初出一九二二年〕。

〔註23〕 『町誌』四七―四頁。

〔註24〕 『町誌』四五―三頁。

〔註25〕 『奥州名所図会 卷之五』〔仙台領の地誌』今野印刷株式会社、二〇〇一年〕、「奥州名所図会」三頁。

〔註26〕 『仙臺叢書別集第四卷 塩松勝譜』八五頁。『町誌』四六七頁。

〔註27〕 『陸前国宮城郡地誌』〔町史』資料編Ⅱ、一三五―七頁。

〔註28〕 このほかにも、現在では長老坂から湯ノ原を經由して居網地区に出る谷筋の道や、桜渡戸から初原・愛宕へと抜ける谷筋の道（現県道八号線）が地域の主要道となっている。いずれも中世段階に遡るか

どうかは不明だが、前者は長老坂から白坂不動・龍沢寺・城内山城方面へ出る道であり、湯ノ原には古い由緒を持つ温泉と嘉暦三年（一三二八）の板碑などがあり、人の往来があったことを示唆する。後者の道筋は桜川が曲がりくねって流れていたため、近世段階では交道路として利用することはなかったとされている（『町誌』五二―九頁など）。

（4）城館

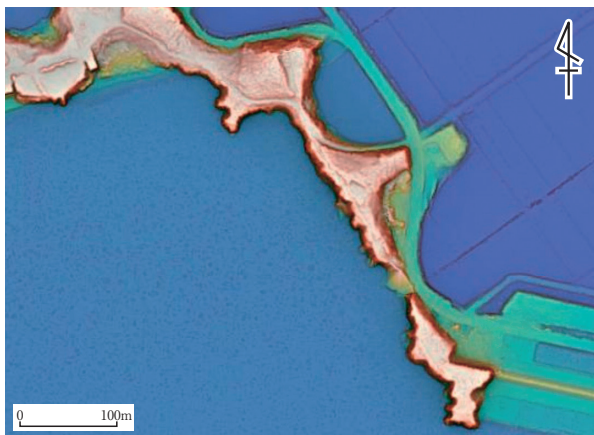
松島町内には、現在六つの城館（館山館（反町館）、大日山館、城内山城、愛宕館、館ヶ崎城、要害館）が確認・登録されている。いずれも高城地域に所在しており、「松島」には確認されていない。霊場「松島」には武家による築城ができなかったのだろう。

これらの城館に関する研究は、『町誌』⁽²⁹⁾、『町史』⁽³⁰⁾のほか、紫桃正隆『仙台領内古城・館』や『日本城郭大系』⁽³¹⁾などが挙げられる。しかし、関連する文献史料はほとんどなく、発掘調査も館山館において部分的に行われているくらいで、その歴史は不明瞭である。

そのため、松島町教育委員会のご協力を得ながら、遠方にあるかつ明確な遺構を確認できないという要害館以外の踏査を行い、大日山館、城内山城、愛宕館については縄張図も作成した。また、貴重な赤色立体地図のデータも入手できたので、これらによる所見を交えながら、各城館についてまとめたい。

町内の城館のうち、文献史料に登場する唯一の城館は、館ヶ崎城である。先述のように、「奥州余目記録」には、畠山国詮方と吉良貞経方との合戦に関連して「長田の城」が登場する。応安六・七年

(一三七三・七四) 頃の出来事と推定されているが、そこには「三間ハ海也、落所なくして舟にてかいとうへおち給ひて」と記されており、三方を海に囲まれた城館だったことがうかがわれる³³⁾。比較的最近まで、館ヶ崎城の地は海に突き出た岬であった。そのため、これまで「長田の城」は館ヶ崎城に比定されており、筆者も妥当と考える。館ヶ崎城は、おおよそ三つの曲輪からなり、現在も堀切・土塁状の遺構がみられるが、近代以降の改変・破壊もあり、不明瞭な点が多い。【図3】の赤色立体地図からも、多くの情報は読み取れない。



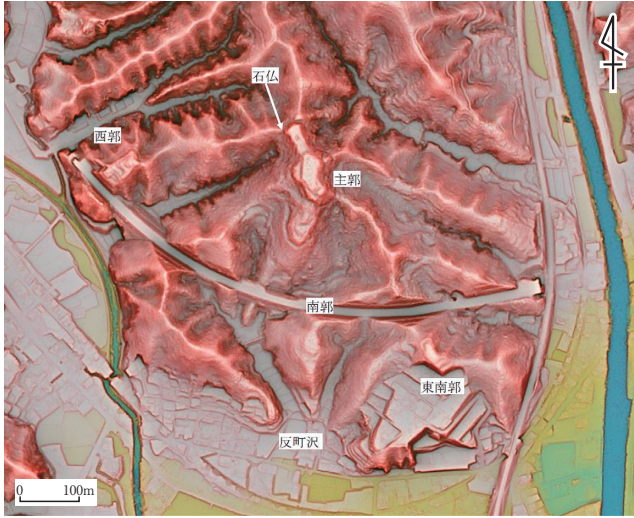
【図3】：館ヶ崎城の赤色立体地図
(提供：谷口宏充氏。作成：アジア航測株式会社)

一方、町内最大の城館である館山館は、近世高城宿の北一・五kmに位置する本格的な山城である。松島有料道路(現三陸自動車道)の建設にともない、昭和五六年(一九八一)に城域南側を東西に横断するかたちで発掘が行われ、城域全体の測量図も作成された³⁵⁾。ここでは、【図4】の赤色立体地図をもとに概要を述べたい。

館山館は、主郭を中心とした中央郭群と、そこから各方向へ伸びる尾根上に西郭・南郭・東南郭などの遺構が展開している。主郭は広く二段に分かれており、よく削平されているが土塁は確認できない。主郭下段南側には枡形虎口状の部分もあるが、その先は急斜面となっていて下段の曲輪へ続いておらず、評価が難しい。その南には岩盤を削った大きな堀切があり、さらに南側に段々状に曲輪が続く。南西下方には沢に並行する形で堀底道状の通路があり、途中に礎石のような石がある。その奥には門跡があるとされるが、該当箇所を見てもよくわからなかった。

主郭の北端と北西端にも岩盤を削った堀切があるが、このうち北西端の堀切には中世のものと思われる石仏が彫られている³⁶⁾。近代初期の古地図を見ると、城跡南麓(反町沢。現在は田んぼと池がある)から先ほどの堀底道状の通路、さらにはこの堀切付近へ向かう山道が通っていることから、古くから道として機能していた可能性がある³⁷⁾。その他の曲輪は踏査していないが、赤色立体地図を見ても、先行する測量図と概ね一致している。

発掘調査は、各曲輪の中心部から外れていたこともあり、確認された遺構・遺物は少ない。それでも、西曲輪の一部については、同

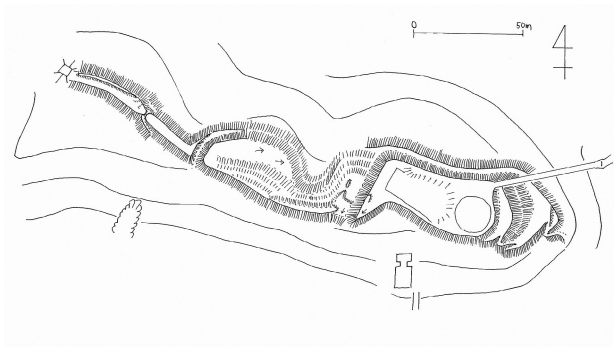


【図4】：館山館の赤色立体地図

(提供：谷口宏充氏。作成：アジア航測株式会社。一部加筆)

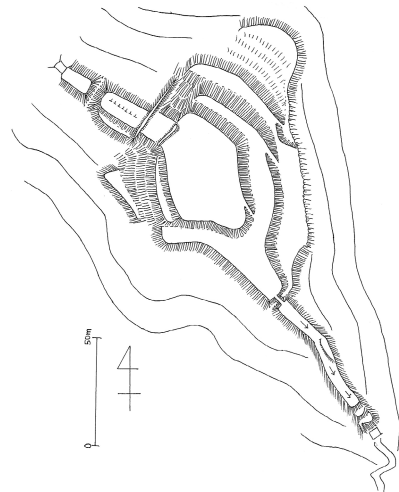
時期に造られた掘立柱建物跡・柱穴列跡・門跡・通路が確認され、十五世紀後半の陶磁器（古瀬戸）の深皿が整地層から出土した。また、城域東端のIV区からも、十三・十四世紀の甕・播鉢や十四・十六世紀の貿易陶磁（青磁碗）、鉄砲玉などが出土した。そのため、報告書ではひとまず館山館が十五世紀後半には成立していたとし、この地域との関係が深い相馬氏の城館と推測している。

次に、大日山館・城内山城である（【図5～7】）。両城は谷を挟んで隣接しており、一体的な城館として評価されている。大日山館



【図6】：城内山城縄張図

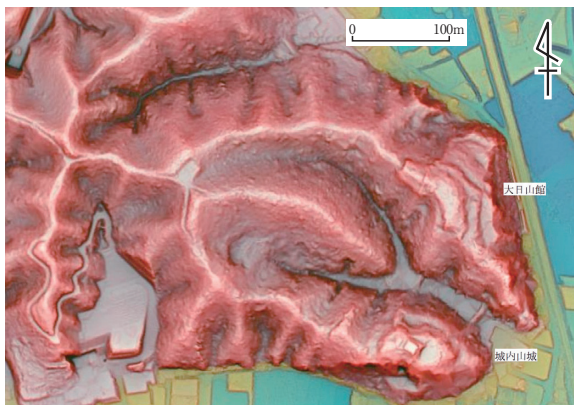
(2018年2月6・20日調査。作図：竹井英文。協力：佐藤由浩、佐藤耕太郎、岡田涼也、奈良輪俊幸)



【図5】：大日山館縄張図

(2018年1月23日、2月20・28日調査。作図：竹井英文。協力：佐藤由浩、佐藤耕太郎、岡田涼也、奈良輪俊幸、早野郁也)

へは、現状では南麓の大日堂の脇から登っていくのが一般的であるが、当時の登城路かどうかは判然としない。ほどなく明瞭な堀切と土橋に出くわし、それを越えると主郭が見えてくる。主郭の西北側には小規模ながら土塁が二つあり、それを越えた西北の郭の先端には、城域を区切る城内最大の堀切がある。一方、主郭の東側には細長く広い曲輪が二段あり、途中にはそれらを繋ぐ通路のような遺構も確認できた。また、赤色立体地図を見ると、東北尾根筋にも段々状に曲輪らしき平場が続いていることが確認でき、遺構の可能性が高い。あるいは、こちらが登城路だったのだろうか。大日山館は、



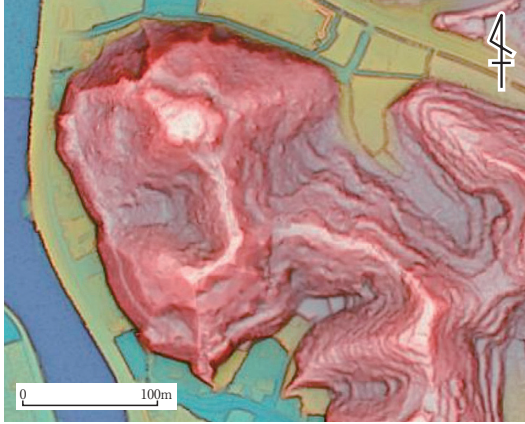
【図7】：大日山館・城内山城の赤色立体地図

(提供：谷口宏充氏。作成：アジア航測株式会社。一部加筆)

近代になってから一部に桜が植えられ公園風に整備され、その季節には賑わったとされており、近代以降に改変を受けた箇所があると考えられる。

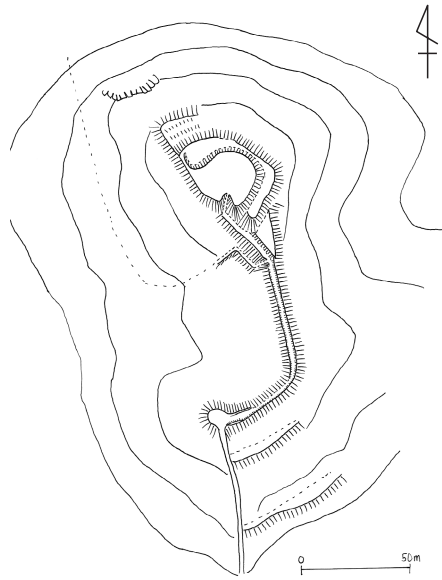
隣接する城内山城は、主郭部分に浄水施設があるため、大きく破壊されている。登城路はやはり不明だが、紫桃氏や『町史』は現在もつづら折りに東南麓の民家へ続く道に比定している⁽³⁹⁾。先行図では浄水施設の裏側(西側)に堀切が描かれているが、現地を確認した限りでは、堀切とはいえない地形であった。その先はほとんど自然地形のようだが、西端には小規模ながら明瞭な堀切がみられ、北東方向へ曲がっている。堀切の西側は、鉄塔がある付近まで細長い平場が続き、途中に土塁状のものがあるもの、おそらく鉄塔の工事関係のものではなからうか。その先の尾根を進んでくると回り込むと、大日山館の西北端の堀切に出るが、その間には遺構らしきものは見られず、赤色立体地図からも確認できない。

最後に、愛宕館である(【図8・9】)。山頂の主郭には愛宕神社の小さな祠がある。現在は南麓から石段・坂道を登っていくが、あまりに急峻で狭く、当時の登城路とは思えない。このほか、西北麓から主郭下へ通じる道もある。主郭周囲には腰曲輪がまわり、南斜面には帯状の長い平場が二つある。先行図では東側の尾根に堀切があるとしているが、藪が酷いうえに民家裏であったため、未確認である。赤色立体地図からは、縄張図で描いた範囲以外にも平場らしきものが確認できるが、いずれもはっきりしない。愛宕館は、実は近世の地誌類には記載がない城館で、いつから城館と認識されたの



【図9】：愛宕館の赤色立体地図

(提供：谷口宏充氏。作成：アジア航測株式会社)



【図8】：愛宕館縄張図

(2018年11月25日調査。作図：竹井英文。
協力：竹井ゼミ生・その他学生有志)

か不明である。要検討の城館といえよう。

以上、城館跡を概観したが、規模・構造からして別格で明らかに拠点城館であるのは館山館である。一方、近世の地誌類では、城内山城（および大日山館）を「神楯城」と呼び、戦国期の高城氏の居城であったとしているものが多い。実際、城内山城近辺に戦国期や高城氏に関係する寺社や伝承が集中しているのも事実である。規模にしても、近隣の留守氏の岩切城や黒川氏の御所館などと比べるとあまりに小さいが、大松沢宮沢氏の居城大窪城とは同規模といえる。そのため、城内山城や大日山館、なかでも大日山館の方が可能性は高いように思われるが、現状では評価が難しい。

中世の高城地域の空間構造は不明瞭な点があまりに多く、推測に推測を重ねざるをえなかった。しかし、全体的な傾向としては、戦国期にかけて徐々に北の方から南の方へ重心が移動しているようにみえる。その背景には、陸地化の進行とともに、高城宿や磯崎港の前身となるような町場・港の成立と発展、政治権力との関係などが想定されようか。こうした空間認識をもとに、以下文献史料を中心とした検討に移りたい。

〔註29〕『町誌』一一六～一一九、一二三・一二四頁。

〔註30〕『町史』一六四～一六七頁。同資料編1、四四九～四六〇頁。

〔註31〕紫桃正隆『史料 仙台領内古城・館』三卷（宝文堂、一九七三年）。

〔註32〕『日本城郭大系』二（新人物往来社、一九八〇年）。

〔註33〕佐々木慶市『奥州探題大崎十二代史』（今野出版、一九九九年、四三頁）。

〔註34〕「奥州余目記録」(「仙中」余目家文書一六号、二四二・四三頁)。

〔註35〕「松島有料道路関連調査報告書Ⅰ 館山館跡」(宮城県文化財調査報告書第八七集、一九八二年)。

〔註36〕森田義史氏にご教示いただき、案内もしていただいた。

〔註37〕先行研究でも同様の道筋を想定している(前掲注〔31〕紫桃著書五四三頁、前掲注〔35〕報告書三二頁など)。

〔註38〕前掲注〔31〕紫桃著書五五〇頁。

〔註39〕ただ、「塩松勝譜」によると、城内山城と思われる場所の北側に「北門」と呼ばれる部分があったという(「仙臺叢書別集第四卷 塩松勝譜」八七頁)。あるいはこれが大手門なのかもしれない。

第三章 室町・戦国前期の松島高城地域

本章では、第一章で指摘した課題のうち、①の室町・戦国前期の松島高城地域について検討したい。

この時期の高城地域を考えるうえで重要な氏族が、その北西方面に位置する黒川郡大松沢を本拠とする宮沢氏である。宮沢氏は、伊達家初代朝宗に仕えた飯田八郎左衛門吉実を祖とする譜代家臣で、陸奥伊具郡宮沢(宮城県角田市)を与えられて宮沢氏を称した。その後、南北朝期に九代伊達政宗が黒川郡大松沢を与えたことにより、同地に移住し本拠とするようになった。

大松沢は、高城地域とは近世においても密接な繋がりがある地域であった。そうした地域間の関係は中世段階でも同様で、高城地域関係史料には宮沢氏がたびたび登場するのである。

最初に登場するのは、「奥州余目記録」においてである。大崎氏

六代で「朔の殿」「朔の上様」と呼ばれた大崎持詮(持兼)の弟・弥三郎直兼が、留守氏に入嗣し「高森殿」と呼ばれるようになった後に、周辺地域へ急速に勢力を拡大していった様子を記した部分である。厳密な年代比定はできないが、永享期(一四二九〜四一)の出来事と考えられている⁽¹⁰⁾。

【史料1】(表) No.3

一 駿河守悉本所を国分へ取られ候て、其いきとをりおひたし、大さき六代朔の殿御舎弟弥三郎殿直兼と申候、後二青塚殿と申候ヲ、我か城高森へ申越、我か宿所うわたて二置奉り、駿州ハ中城へおり、其後ハ村岡城、おと森へおり給ひて、代官ニ村岡刑部少輔、遠江守舎弟也、南宮佐藤ヲさしそへ奉り、いつきかしつき奉り候、国分をハたいちし給ハす、結句むこ二成給ふ、然ハ大谷保ニ其比城くハくなし、さと在所まで二候を、代官を入、三年知行し給ふ、竹城保宮沢大利八郎とて有、其在城せめおとし二年御知行、かハうちにもかなたこなた百余郷知行し給ひて、名取も大かた御手を入られ、すて二国二二人の大將のこたく也、

これによると、宮沢大利八郎なる人物が当時高城保におり、某城に在城して大崎直兼方と合戦を繰り返していったことがわかる。結局、宮沢氏は敗れたため、直兼がその後二年間にわたり高城保を知行し、さらに河内(大崎地方)の百余郷や名取郡も知行して急成長していった様子が記されている。この宮沢大利八郎は、大松沢の宮沢一族と考えて問題なからう。つまり、十五世紀前半に相馬氏に

代わって高城保に勢力を伸ばしてきたのは、大松沢の宮沢氏だった可能性が高いのである。なお、宮沢大利八郎は、他史料や宮沢氏の系図類には登場せず、当時の当主なのか一族なのかどうかも不明である。

大崎直兼によって一時期高城保を追われた宮沢氏であったが、詳細は不明ながら、数十年後に再び史料上に登場する。

【史料2】(表) No.7⁽⁴¹⁾

此度老父掃部介忠節為恩賞宛渡所帯之事、奥州名取郡飯野坂郷ノ内南之在家一字、竹城保根崎郷之内一字、下在家一字、竹之花在家一字、蛭沢在家、右彼地知行之事、於未代不可有相違者也、仍証状如件、

明応四年乙卯五月廿二日 尚宗

宮沢又六とのへ

宮沢又六祐実宛ての、伊達尚宗判物写である。本史料からは、明応四年(一四九五)の段階で、宮沢祐実が飯野坂郷(宮城県名取市)とともに高城保の根崎郷(現根廻地区の一部。館山館の直下)などに所領を宛行われていることがわかる。その背景として、祐実の父時実が尚宗に忠節を尽くしたことが記されている。同三年四月、伊達成宗・尚宗父子の間で内紛が勃発し、尚宗は一時的に会津蘆名盛高のもとへ逃げ延びていたことが知られている。これに関連して時実も何らかの働きをし、それに対する恩賞として子の祐実に根崎郷ほかを宛行ったものと考えられる。内容からして新恩給与なのだろうが、前掲【史料1】を踏まえれば、これ以前に高城地域に所領を

すでに得ていた可能性もある⁽⁴⁴⁾。

次に高城地域が登場するのは、伊達種宗の代、天文七年(一五三八)九月に作成された著名な「御段銭古帳」(表) No.11) においてである。ここに、いわゆる「飛び地」という形で高城地域が登場している。その段銭高は八十五貫文で、これとは別に「夫ちん」(人夫役)と「は、き代」(草履代・足代・使い役などの説あり)が記されている。少なくとも高城地域は、この時点で伊達領国に編入されていたこと自体は間違いなからう。先の【史料2】の段階とは異なると考えたい。

ところで、「御段銭古帳」は基本的に郡荘・郷村ごとに記されているが、高城地域に関しては郷村名が登場せず一括して記されており、段銭額も少ない。これは、近隣の松山庄(宮城県大崎市)や大松沢などでも同様であり、何らかの性格の違いによるものと思われる。また、三年半前に作成された「棟役日記」には、高城地域や松山庄・大松沢などは登場しない。三年半の間に何らかの変化があり、「御段銭古帳」に記載されるようになったとも考えられる。

こうした点について、早くに「御段銭古帳」を検討した誉田慶恩氏は、「天文四年の「棟役日記」に記されていなかったこれら名取郡以北の地方は、伊達氏の領土化したのが比較的新しく、領国化が不十分であったと考えられる。これらの地方では豪族層がなお根深く在地支配権力を保持したまま、伊達氏の傘下に掌握されたため、段銭徴収も豪族ごとに行われたのであろう。また、有力な豪族の多くが伊達氏に帰参した結果、伊達氏の勢力は名取郡以北にも伸

びたが、その領域はいまだ散在的で、点状の所領形態を脱し得なかつたと思われる⁽⁴⁵⁾」としており、現在も基本的にはこの考え方が支持されている⁽⁴⁶⁾。

問題は、当時の高城地域の内実である。一部に伊達氏の直轄領が設定されていた可能性もあるが、基本的には誉田氏という「豪族層」の所領が展開していたはずである。その領主とは誰なのだろうか、残念ながら「御段銭古帳」には記されていないので、不明である。

しかし、次の史料から、その一端が垣間見えてくるのである。天文十一年（一五四二）六月に勃発した伊達植宗・晴宗父子の争い、いわゆる伊達氏天文の乱の最中のものである。

【史料3】（表）No.13

同日賜判書於宮沢越前。曰今般奉公無二。因任望高城郷内高森分。并鹿保藤兵衛分与之。自今以後猶以忠節為肝要。依為後日証状如件。

伊達植宗が、天文十三年閏十一月二十八日に宮沢越前に宛てた判物の写し（取意文）である。『伊達正統世次考』の註によると、越前の実名は不明で、又六実家の親族というとしているが、「大松沢家家譜」によれば、祐実の弟清実が越前を名乗っていたというので、清実に比定される。また、同家譜では、祐実が早世したのか、嫡子又六元実は幼少であったため、清実が「番代」を務めたものの、悪意により家乗を承継し取ろうとしたため、「番代」を解任されたとしている⁽⁴⁸⁾。この事件の時期は不明だが、天文の乱時には、宮沢氏が清実派と元実派に分裂した可能性が高い。というのも、同十一年八月に

元実は晴宗から获・大松沢二郷の「田役・棟役」の直納を許可する判物が出され、同十五年にはそれに加えて本領を安堵されているからである⁽⁴⁹⁾。そうなると、清実は植宗派、元実は晴宗派として活動していたことになる。

その清実に対して、植宗は「高城郷」のうち「高森分」、すなわち留守景宗の所領と、鹿又藤兵衛の所領を与えるとしているのである。景宗は晴宗派だったので、その所領を没収して与えようとしたのだろう。ここから留守氏がこの時点で高城地域に所領を有していたこと⁽⁵⁰⁾、留守氏だけでなく鹿又氏の所領もあつたことが判明する。また、高城「保」ではなく高城「郷」と記されていることは注目される。近世高城本郷の原型ともいえる新たな所領単位がこの頃に生まれた可能性を示唆しよう。

実は、後掲【史料6】からも、同十六年段階において、大松沢氏、桜田氏、広岡氏などの所領が高城地域にあつたことがわかる。こうしたことから、天文年間段階の高城地域は、諸氏の所領が分散・錯綜していたのが実態だつたと思われる。「御段銭古帳」で高城地域が一括記載になっており、点状の所領形態になっていた背景には、こうした点も考えられよう。

それでは、植宗に対する宮沢清実の奉公とは、具体的に何を指すのだろうか。

【史料4】（表）No.14

十一月二日。賜判書於壱岐豊後云。去年於立馬於長田之時。棄進退以無二奉公。因是命大谷之地総成敗。嚴密執行之。仍証文

如件。

伊達植宗判物写（取意文）で、『伊達正統世次考』天文十四年条に収録されている。宛所の杵岐豊後の詳細は不明だが、周辺地域の領主だろうか。^(註4)これによると、杵岐豊後は当初晴宗方だったようだが、植宗が長田へ出陣した時に植宗方へ鞍替えして奉公したので、黒川郡大谷（大郷町）の総成敗に任じた、ということになる。植宗方と晴宗方との争いが松島地域においても展開しており、それに対して植宗が自ら出陣し、事態の打開を図ったのだろうか。この出来事は、他の史料では確認できないが、事実だとすると、【史料3】における宮沢清実の奉公とは、長田における植宗方としての活躍ぶりを指すのだろう。

以上、室町・戦国前期の高城地域について、主として文献史料の読解を中心に検討した。相馬氏の高城保撤退後、天文年間まで大松沢の宮沢氏が進出していたこと、少なくとも天文七年には伊達領国に編入され段銭が賦課されるようになったこと、天文年間には宮沢氏だけでなく留守氏など諸氏の所領が分散・錯綜していた可能性が高いこと、同時期に「高城郷」が登場することなどを指摘することができた。

こうした政治情勢の推移をふまえると、十五世紀後半以降という年代がひとまず与えられている館山館は、宮沢氏に関連する城館だった可能性が高いと考える。宮沢大利八郎が在城した城館と、出土した古瀬戸の年代観とはややズレがあるが、その他の遺物も含めれば年代幅があるのも事実である。十五世紀前半から十六世紀前半

まで宮沢氏が高城地域と深い関係にあったことは間違いなく、館山館もそうしたなかで築城され機能していたのではなからうか。また、天文十三年頃に長田で合戦があったことが事実であるならば、館山館も含めた町内の城館のいくつかは、その頃に機能していた可能性があらう。

(註40) 前掲注(33) 佐々木著書九三頁。

(註41) 『伊達尚宗判物写』(『大郷町史』史料編三、七三・七四頁。宮沢実叔氏所蔵文書「大松沢家家譜(抜粋)」)。なお、『伊達正統世次考』の明応四年五月二十二日条にも取意文が記されている(『梁川町史』五、五一―五頁、「伊達正統世次考卷之七」)が、「飯野坂郷云々」「根崎郷云々」と一部省略されている。そのため、「大松沢家家譜」所収の写しの方が様式・内容ともにより良質と判断し、ここでは【表】の出典とは異なり、そちらを掲出した。

(註42) この宮沢又六について、『伊達正統世次考』では宮沢実家に比定している。しかし、『伊達世臣家譜』『延宝書上』などを参照すると、「又六」は実家の父である祐実、「老父掃部助」は祐実の父である時実(それぞれ比定するのが無難だろう。出典である「大松沢家家譜」でも、祐実宛てとして記載されている)。

(註43) このうち、「蛭沢在家」は現根廻字森沢に該当するだろうか。

(註44) 前掲注(41)の「大松沢家家譜」によると、宮沢氏は大松沢に移住した当初から高城地域を所領としていたかのように記述している。その可能性は大いにあらう。

(註45) 誉田慶恩「在家支配の動揺と戦国動乱——とくに伊達氏の「天文の乱」をめぐって——」(同『東国在家の研究』法政大学出版会、一九七七年、一八八頁。初出一九六七年)。

(註46) なお、小林清治氏は「志田郡松山庄・宮城郡高城保は飛領であるが、伊達・信夫・長井などと共に、以前から伊達氏の棟役・段銭賦課権

が及び、おそらく段銭古帳作成を契機に知行制にもとづく主従制が確立した伊達領国を構成する」としており、「御段銭古帳」作成以前から高城地域にも棟役・段銭賦課権が及んでいた、すなわち領国化していたと考えているようである。少なくとも【史料2】から伊達尚宗期には伊達氏の勢力が高城地域に及んでいることは確かであり、天文期にかけて徐々に伊達領国化が進展していったといえよう。

(註47) なお、本史料は「大松沢家譜」には写されていない。

(註48) 「大松沢家譜(抜粹)」(大郷町史)史料編三、宮沢実叔氏所蔵文書、七四頁)。

(註49) 「伊達晴宗証状取意文」(古川市史)第七卷、三〇七・三二七号、「伊達正統世次考卷九上・下」。

(註50) なお、この頃の「松島」と留守氏との関係がうかがわれる史料として、天文十年代成立の「留守分限帳」と一連のものと思われ、留守領に所在した寺社を記したと考えられている「寺家社家之日記写」がある(表)No.16)。そこには、「松島山寺ふん十二坊」「松島寺分御ミヤの御神りよ」とみえる。もう一点は、要検討文書であるが、天文十年三月二日付け「留守政景恩賞宛行状写」(表)No.12)で、家臣の須田伊賀守が「松島村二而千五百疋」を与えられている。いずれにせよ、「松島」は留守領であったようである。

(註51) 「大郷町史」(一九八〇年、一八六頁)では、葛西氏の家臣である可能性を指摘している。「壱岐」と「高城」の崩し字は類似しているともいえるため、「伊達正統世次考」編纂の際に「高城」を誤って「壱岐」と翻刻したのかもしれない。いずれにせよ、原本・良質の写しの発見を期待したい。

第四章 高城氏の出自について

本章では、第一章で指摘した課題②、すなわち戦国後期の高城地域を支配していた高城氏の出自・動向について検討したい。高城宗

綱および高城氏については、諸史料によってさまざまな説があり、一定しない。ここでは、まず各説についてまとめてみたい。

宗綱の子孫は仙台藩士として存続したため、『伊達世家譜』に高城家が立項されており、そこに詳細な記載がある。それによると、式部少輔宗綱(始めは「宮城孫五郎」)は留守顕宗の実子として誕生したものの、病弱であったという。そのため、留守氏は伊達氏から養子を迎え入れ当主とすることに決し、永禄十年(一五六七)に晴宗の五男が入嗣して留守政景となった。ところが、その後宗綱の病気が治ったので、伊達輝宗が三〇〇石を与えて別家として取り立て、宮城郡菅谷(宮城県利府町)に住ませたが、後に宮城郡高城に移住させ、高城を氏姓としたとある。⁵²⁾

仙台藩の公式記録である『伊達治家記録』にも、①永禄十年三月七日条、②天正十六年正月十七日条、③同十九年三月五日条に高城氏に関する記載がある。①には、留守政景の家督相続に関して、前代顕宗に実子宗綱がいたものの、「留守家往々衰微ニ及フ故ニ、政景ヲ養ヒ大家ニ依テ近郡ノ畏レ無ラン事ヲ欲セラル歟」とある。⁵³⁾②には、留守顕宗には実子がなかったため政景を迎え入れたものの、後に宗綱が生まれたので、輝宗が高城莊十二邑を与え、一字を与えて宗綱と名乗らせ、高城を氏として称させた、とある。⁵⁴⁾③では、上記とほぼ同様のことを述べつつ、次の史料に注目して、宗綱以外に高城周防守と助三郎(宗直)が存在していたことを指摘している。

【史料5】(表)No.35)

一 高城周防・同式部・同助三郎へ被下候御書写

上洛付而、遠路之脚力本望候、隨而 天下様種々御念頃之義共、不及是非、然間各取成無手透候、扱又葛西・大崎兩郡仕置等、被 仰付候条、近日可為下国候、委細義、原左可申越候間、早々、恐々謹言、

(天正十九年)
弥生五日 政宗公御書判

高城周防守殿

同 式部少輔殿

此所キレ
不見 三郎殿

右、高城助兵衛所持、御記録摘載之、

本史料は、伊達政宗が上洛中の天正十九年（一五九一）三月五日に、高城周防守・式部少輔（宗綱）・助三郎（宗直）の三人に宛てた書状写で、秀吉から大崎・葛西に対する仕置を命じられたことなどを伝えている。『貞山公治家記録』は、ここに登場する周防守に注目し、宛所筆頭に記されていることから、高城氏の嫡子と考えられるとしている。さらに考察を進め、もともと高城という氏族が存在しており、そこに宗綱が養子として入り、留守家の領地を割き与えた、それを後世に宗綱によって新規に高城氏が成立したかのよう⁽⁵⁵⁾に誤って伝えてしまった、つまり周防守は宗綱の養父であつて、【史料5】の段階では隠居の身だったのではないか、ともしているのである。

このほか、『留守氏家譜』によると、宗綱は顕宗の側室の子であり、永禄九年に「病痾」となったため、留守家中の大半が政景擁立を建言すると、余目・村岡・佐藤氏らが反対して騒動に及んだという。

結局政景が入嗣し、輝宗が宗綱に三百貫文の知行を与えたとしている⁽⁵⁶⁾。さらに、仙台藩士高城家に伝わった伝承によると、顕宗に実子⁽⁵⁷⁾がなかったため政景を養子にしたものの、その後宗綱が生まれたので、成長後に高城地域と「宗」字を拝領して高城式部少輔宗綱と名乗ったという。

このように、おおよそは共通しているものの、異なる部分も多々あり、不明瞭な点が多い。ただ、【史料5】から宗綱の前代と思われる高城周防守なる人物が存在していたことは確実であり、『伊達日記』（『成実記』『政宗記』）にも天正十六年の大崎合戦に関連して高城周防守が登場していること、後掲【史料7】から宗綱が「縁約」によって高城氏を継承していることとみられることから、早くに『水沢市史』なども指摘するように、もともと高城氏という領主がいて、当時の当主高城周防守のもとに宗綱が養子として入った可能性が高い⁽⁵⁸⁾。

この点を踏まえたうえで、これまで注目されていない二つの系図史料に注目したい。一つは、黒川郡の領主黒川氏の系図（源家足利黒川系図）および「源姓黒川氏大衡家族譜」である⁽⁶⁰⁾。「源家足利黒川系図」には、天文二十一年に没している黒川景氏の娘の一人が「高城式部妻」と記されている。高城宗綱は、式部少輔を名乗ったことが確実であり、この「式部」も宗綱のことを指すと考えられる⁽⁶¹⁾。

特に注目すべきなのが、「源姓黒川氏大衡家族譜」で、高城氏が複数登場する。まず、文明七年（一四七五）没の当主黒川氏基の弟

とされる氏時について、「高城六郎玄蕃允」「文安五年三月奥州宮城郡高城邑主高城越中守源時綱所養継氏」と記している。文安五年（一四四八）年頃の高城地域に高城越中守時綱なる人物がすでにおり、黒川氏一族の氏時がその養子となつて高城六郎（玄蕃允）を名乗ったとしているのである。さらに、氏時の弟で氏基の次代、明応九年（一五〇〇）没とされる当主黒川顕氏の娘の一人は「高城周防守源時直室」と、天文二十一年（一五五二）没の当主黒川景氏の妻（四男宗氏の母）は「高城周防守源時直女」とも記されている。⁽⁶²⁾この周防守時直は、素直に考えれば氏時の嫡子であろう。周防守という名乗りから、宗綱の養父周防守その人とも考えられるが、時期的な問題からして、さらにその前代と考えた方が無難ではないか。

これらを総合すると、越中守時綱→玄蕃允氏時→周防守時直→周防守某→式部少輔宗綱という系譜になろう。こうした記述が事実だとすれば、高城氏という氏族は十五世紀前半には高城地域に存在していたのであり、かつ黒川氏との関係が深く、周防守某の段階に宗綱が留守氏から養子入りして高城氏を継承した、という流れが描ける。しかし、黒川氏との深い関係がうかがわれるものの、越中守時綱の来歴などもとの出自は不明のままである。あるいは、相馬氏や宮沢氏の一族として高城氏が成立していたことも考えられようか。

もう一つの系図史料として、相馬中村藩士高城氏の系図が挙げられる。その初代生駒左兵衛に関する説明文には、「或記曰、長州義胤公尊夫人ハ、者深谷氏令愛也、深谷氏親戚ニ有高城讚岐と云者、

以故来于相馬賜祿三百石云々、或云此説謬レリ矣」とある。⁽⁶³⁾相馬義胤室は、高城地域に隣接する深谷保を領する長江盛景の娘（一族三分一所氏の養女）であることはよく知られている。⁽⁶⁴⁾

長江氏は、高城保の東隣の深谷保を鎌倉期から支配している領主であり、寛正年間（一四六〇～六六）に伊達氏に従属したといわれている。当時は小野城を本拠としていたと思われるが、小野城下は近世においても石巻街道の小野宿として栄え、高城宿の次の宿場町であったため両地間の往来も頻繁にあった。その長江氏の「親戚」として高城讚岐なる者があり、後に相馬義胤に仕えたというのである。高城地域と関係が深い氏族と考えることが自然だろう。ここから、宗綱が高城氏を継承した頃、あるいはそれ以前に、長江氏一族の高城氏が高城地域に存在していた可能性を指摘できる。

この長江氏一族としての高城氏の存在は、上記黒川氏の系図には記されておらず、それから想定できる高城氏の歴史とは齟齬を来す。ただ、次の史料を踏まえると、長江氏一族としての高城氏が存在していた可能性は十分考えられるのである。

【史料6】（表）No.15⁽⁶⁵⁾

一大松沢又六分、一桜田分、一伊具庄広岡分、一はたや一郷、
 何も高城之内之地、永代進候也、仍為後日如件、

天文十六年極月廿日 晴宗（花押）

長江助九郎殿

天文の乱の終盤に出された、伊達晴宗判物である。宛所の長江助九郎は、当時の長江氏本宗家の長江盛景と考えられている。⁽⁶⁶⁾これに

よると、晴宗は高城地域にあった大松沢・桜田・広岡氏の所領に加え、幡谷郷を盛景に宛行っていることがわかる。天文の乱が勃発して間もない同十一年段階では、長江氏一族の三分一所氏が晴宗方、本宗家を含めたほかの一族はみな種宗方となっていたことが確認できるが、本史料から乱の終盤には本宗家も晴宗方に鞍替えしたものと
思われ、それに対する恩賞として高城地域の所領が宛行われたの
だろう。⁽⁶⁸⁾

このうち「大松沢又六」は、清実と対立していたと思われる祐実の嫡子又六元実のことだろう。先述したように、元実は晴宗派だったはずだが、天文の乱末期の一時に種宗派に鞍替えした形跡があるため、このようになったのだろう。結局、元実は再度晴宗に帰順している。桜田・広岡も伊達氏の家臣だろう。この三氏が、少なくとも同十六年以前の段階で高城地域に所領を有していたこと、いずれも種宗方であったことが判明する。【史料2】との関係から、「大松沢又六分」には根崎郷が含まれていたと思われる。なお、本史料は宮沢氏が高城地域に所領を有していたことを示す最後のものである。

本史料が出された翌年、天文の乱は晴宗方が勝利して終結した。そのため、おそらく本史料は約束手形に終わることなく、これらは長江氏の所領になったものと思われる。ここに至って、高城保に隣接する深谷保の長江氏の勢力が、高城保へ拡大したと考えられるのだが、その際に長江氏が一族を高城地域に置いて高城氏を名乗らせた、その人物こそ高城讃岐なのではないか、と推測することは可能

だろう。ちょうどその頃は、宗綱の前代周防守某が活躍していたと考えられる時期であるが、周防守某と讃岐との関係は不明である。⁽⁷⁰⁾以上、系図史料に大きく拠りながら高城氏について検討した。この頃の領主が周辺領主と複雑な婚姻関係を築いていたことはよく知られていることであり、高城地域が黒川郡や深谷保と隣接し、超時代的に密接な交流があったことを踏まえると、高城氏という氏族は黒川氏や長江氏、宮沢氏などと深い関係にあり、そのなかで誕生した氏族であった可能性は十分ある。

〔註52〕『仙台叢書 伊達世臣家譜』第一卷、第一輯一〇七頁（卷之四）。他にも分家の高城家の家譜が第一卷の第二輯二二・二三頁（卷之八）、第三卷の第五輯四・五頁（卷之十五）にある。

〔註53〕『性山公治家記録卷之二』（仙台藩史料大成 伊達治家記録）一、宝文堂、一九七二年、一九六頁。

〔註54〕『貞山公治家記録卷之三』（仙台藩史料大成 伊達治家記録）一、宝文堂、一九七二年、三五二頁。

〔註55〕『貞山公治家記録卷之十六』（仙台藩史料大成 伊達治家記録）二、宝文堂、一九七三年、二七五・七六頁。

〔註56〕『留守氏家譜』（『水沢市史』七 資料編、一三二頁）。

〔註57〕『高城助兵衛書出写』（『仙中』編年三三二一、二二一頁）。

〔註58〕『伊達日記』（『群書類従』第二十一輯 合戦部、一八六頁）。

〔註59〕『水沢市史』二 中世（一九七六年、七六五～七六八頁）。なお、高城周防は、実は近世の地誌類のなかにもしばしば神楯城主として見えている。

〔註60〕『大和町史』上巻（一九七五年、三五四～六〇頁）。前者は、黒川氏の菩提寺・報恩寺旧蔵で、東京大学史料編纂所に謄写本が残されている。後者は、『大和町史』編纂時点で『岩手県水沢市大衛忠氏所蔵』

という。

- (註61) 江戸後期に記されたと思われる、長江氏家臣夷塚氏に關係する「夷塚覚書」(男沢勝氏所蔵、東松島市図書館にコピーあり)には、三分一所家景の妹が「宮城郡高城殿」へ嫁いだとの記述がある。同史料では「高城殿」を山岡重長に比定しているが、时期的に宗綱か周防守某に当たろう。伝承レベルの話ではあるが興味深い(阿部昭吾「史料紹介」長江氏由緒書「夷塚覚書」『葛西史研究』第十一号、一九九三年、八七頁)。

- (註62) なお、『大和町史』上巻四七三頁でも、この系図をもとに黒川景氏について「宮城郡の高城氏や大崎一族の一派氏からの女も娶っている」としている。

- (註63) 『相馬市史資料集 特別編一七 衆臣家譜卷十七』(相馬市、二〇一一年、一一一頁)。

- (註64) 相馬氏と長江氏・三分一所氏との關係については、岡田清一「三分一所氏と相馬氏」(『平成一四年度岡田ゼミナール研究年報第二五輯 宮城県鳴瀬町調査報告書——地域研究の方法と課題——』東北福祉大学総合福祉学部岡田ゼミナール、二〇〇三年)を参照。

- (註65) 『古川市史』第⑦巻では、『伊達正統世次考』により冒頭部分の欠損部分を補っており、ここではそれを含めた積文とした。

- (註66) 実際、「三分一所氏系図」では、盛景のことを「始称助九郎」としてしている(『石巻の歴史』第一巻通史編上、補遺編年史料二七・二八号、三分一所文書)。

- (註67) 『伊達晴宗書状』(『仙中』留守家文書四三三号)に「深谷家中三分一所之外、引組相替候哉、言語道断候」とあることによる。

- (註68) ただし、本文書が三分一所文書として伝来していることや、天文の乱勃発当時に三分一所氏のみ晴宗方であったことから、長江助九郎は三分一所氏当主の可能性も捨てきれない。そうだとすると、乱当時から晴宗方であった三分一所氏への恩賞という位置付けになり、本宗家は依然として植宗方であった可能性もある。

- (註69) (天文十七年)正月十八日付け「留守景宗書状取意文」(『古川市史』

第七巻、三三二号、「伊達正統世次考卷九下」)に、黒河藤八郎とも「大松沢」らが和を請うたことによる。

- (註70) なお、『角川日本地名大辞典四 宮城県』(八一七頁)では、相馬氏のあとに長江氏が高城保に進出し、竹谷・北小泉・手樽を占領したとしている。この根拠は不明だが、『町誌』九七頁の記述をもとにしたものと思われる。ただ、同じ九七頁に「これを証するに足る資料は、鳴瀬町関係の資料のなかにも見当たらない」とあるように、相馬氏関係史料に登場しないことからの、あくまで推測である。むろん、上記三村は深谷保と隣接しているため、長江氏が早い段階から高城保へ進出していた可能性はある。

第五章 高城宗綱と戦国末期の中奥

本章では、高城氏継承後から奥羽仕置までの高城宗綱の動向について検討したい。まず考えなければならぬことは、もともと留守顕宗の実子であった宗綱が高城氏へ養子入りすることになった経緯についてである。この点に関して、重要な情報を与えてくれるのが、次の史料である。

【史料7】(表) No.19)

急度啓之候、宮城孫五郎縁約付、菟角之儀其間候、乍勿論政景無苦勞候之様二取成、旁々前二可有之候、従此方も近辺之面々へ、為使者相届候、併不可有油断候、余事小山田筑前守任口状候、恐々謹言、

(永禄十二年閏五月)

閏月十二日 輝宗公御印判

余目伊勢守殿

佐藤太郎左衛門尉殿

高橋玄番頭殿

伊達輝宗が、留守氏重臣の余目・佐藤・高橋の三人に宛てた書状の写しで、永禄十二年（一五六九）閏五月のものと推定されている。文中に登場する留守政景は永禄十年に留守氏当主となっていること、宛所の余目伊勢守・佐藤太郎左衛門尉は政景入嗣反対派であったとされ、余目氏は元亀元年（一五七〇）に、佐藤氏は元亀三年頃に政景に反旗を翻して没落していることから、その間の閏月となると、永禄十二年閏五月しか考えられないため、妥当な年代比定だろう。

冒頭に登場する「宮城孫五郎」は宗綱のことである。この時点で「宮城孫五郎」と呼ばれていることから、いまだ高城氏を継承していないことは確かである。⁽⁷²⁾その孫五郎の縁組・婚姻の件で、いろいろと問題が発生しているとの噂が輝宗のもとへ聞こえてきた。このことで留守政景が苦勞しないよう、三人がうまく取り成すことが大事であると述べている。さらに、輝宗からも留守氏の「近辺の面々」へ使者を派遣して連絡・説得するので、油断があつてはならないとしている。

ここでまず注目すべきは、孫五郎の縁組が問題となっていることである。すでに『水沢市史』などが指摘しているように、この縁組はまさに高城氏への養子入りのことを指すのだろう。具体的には、周防守の娘と宗綱の婚姻のことなのではなからうか。それを成立させ、宗綱が高城氏を継承させようとしていた段階の史料である可能

性が高い。つまり、永禄十二年閏五月時点で、いまだ宗綱は「宮城孫五郎」のままであり、この直後に高城氏に養子入りして高城式部少輔宗綱となったと考えられる。そうすると、同十年に政景が留守氏当主となってから二年近くたつても、なお宗綱は留守氏の一員だったのであり、それなりの期間をおいてから高城氏を継承したことになる。政景の留守氏継承と宗綱の高城氏継承は、同時に行われなければならぬのである。

そして、この縁組に関しては、留守氏以上に輝宗の意向が強く働いていたことも同時にわかる。表面的には留守氏から高城氏への養子入りだが、その背後には輝宗がおり、だからこそ輝宗からわざわざ「近辺の面々」に使者を派遣して説得しようとしているのである。この「近辺の面々」は、当然ながら黒川氏や宮沢氏、長江氏らを含むだろう。高城氏の動向が、そうした周辺諸氏にとっても重要な問題であつたことをうかがわせる。

このようにして高城氏を継承した宗綱であつたが、その直後のものと思われるのが、次の史料である。

【史料8】（表）No.20

態令啓上候、仍乍雑説承候へ者、御当口之御様体、色々申成候、如何無御心元奉存候而、御音信令申候、将亦先度於于北目、大町宮内少輔殿淵底之趣、精申上候キ、御披露被申候哉、御床敷令存候、巨碎之段、精被示下候者、可為快然候、併令省略候、
恐惶謹言、

高城式部少輔

林鐘二日

宗綱判

謹上 牧野弾正忠殿

宗綱が、伊達氏の宿老牧野久仲に宛てた書状である。残念ながら写しであり、花押の形もわからないものの、現存する唯一の高城宗綱の文書として大変貴重な史料である。

これによると、宗綱のもとへ久仲がいる米沢方面の様子についての「雑説」が聞こえてきたため、心配したので連絡をしたというところのようである。また、以前粟野氏の居城である名取郡の北目城において、宗綱が大町宮内少輔に思うところを詳しく伝えたが、彼がきちんと久仲（あるいは輝宗か）へ披露したのかどうか心配なので、詳細を知らせてもらえればありがたいと述べている。

本史料の年代は確定されていないが、久仲は元亀元年四月の伊達氏元亀の変で失脚しているため、それ以前である可能性が高い。加えて、【史料7】を永禄十二年閏五月のものとして考えると、本史料は永禄十二年六月としか考えられなくなる。その頃に、なぜ宗綱が北目城へ行ったのか、久仲との関係はどのようなものだったのかなど、不明な点が数多いといわざるをえない。【史料7】のわずかなヶ月弱後の史料ということになり、やや疑問にも思えるが、ひとまずこの一ヶ月弱の間に宗綱が高城氏を継承したものとしておきたい。

こうして高城宗綱が誕生したわけだが、宗綱の所領、すなわち高城領とでもいうべきものの範囲は、具体的にはどうだったのだろうか。先述したように、江戸期の史料では「高城莊十二邑」を与えら

れたとするなど、高城地域を一円的に支配していたかのように記されていることが多い。この点も極めて不明瞭だが、その所領範囲は意外にも狭かった可能性が高いと筆者は考えている。

まず、「松島」については、天文年間の状況や第一章で触れた天正六年の留守政景判物【表】No.26) などから、少なくとも天文期頃から引き続き留守領であったと考えてよいだろう。赤沼郷も、「松島」と留守氏の本拠利府城の間に挟まれた地域であり、おそらく留守領と思われる。また、後述するように、天正十九年段階で政宗から葛西重俊に幡谷村・竹谷村内で所領が与えられていること、手樽村・長田村で検地が実施されていることも注目される。奥羽仕置前までは高城氏の所領だった可能性もあるが、これらの村はもともと高城氏の所領ではなかったのではなからうか。あるいは、早い段階から伊達氏の直轄領が設定されたり、天文年間の史料にみられたように伊達氏家臣の所領が散在していたりしたことも考えられよう。

この後、宗綱は「伊達輝宗日記」「伊達天正日記」にしばしば登場している【表】No.23～25、31・32)。いずれも宗綱から輝宗・政宗への鷹の献上に関する記事である。おそらく、高城地域で捕獲した鷹を献上したものと思われる。

このことに関連して、『町誌』によると、初原村の尾鹿森山（標高一〇八・九m）と大高森周辺は、近世において鷹の産地として知られ、現地に在住する千葉氏の祖先は、仙台藩から幕府に献上する鷹捕りの司として特別な待遇を受けていたという⁷³⁾。尾鹿森山（別名鷹羽取山）は、館山館の北北西約1kmに位置している。尾鹿森山の

南西五〇〇mほどのところには鷹場山という山もあり、鷹との関係が深い地域であることがうかがわれる。おそらく、宗綱が献上した鷹も、こうした近隣地域で捕獲したのだろう。

宗綱の政治的な動向がわかるようになるのは、天正十六年一月に起きた大崎合戦の際である。大崎合戦では、留守政景・泉田重光を両大将に、高城宗綱や遠藤高康・宮沢元実・長江月鑑斎らも加わって大崎へ攻め入った。⁽⁷⁵⁾ 黒川晴氏が敵対したことなどにより形勢不利となり、新沼城(宮城県大崎市)に籠城する事態となった。宗綱も新沼城に籠城したが、二月二十三日に泉田と長江が人質となってひとまず停戦が成立した。これにより、政宗は遠藤・宮沢・高城らは各自の居城を維持することができずに、宮城へ落ち延びていったという噂を耳にしていたが、それは誤報であり、各自の居城に無事戻ったようである(【表】No.28)。その直後の二月二十八日に、政宗は宗綱に書状を送っている(【表】No.29)。ここでは、新沼城から無事帰還できたかどうかを問い、身命無事であることを喜ぶとともに、遠隔地ゆえ十分な連絡が取れなかったことや、最上や二本松方面への対応に忙殺されて十分な援護ができなかったことを釈明している。八月二十七日には、宗綱自身が三春城に在城していた政宗のもとを訪れている(【表】No.30)。大崎方面の状況報告のためだろうか。その後大崎方面の情勢は不穏なままであり、政宗は留守政景を中心に原田旧雪斎や大町宮内らも加えて大崎方との和睦交渉を継続していた。翌十七年四月十六日には基本合意に至ったが、原田・大町が「無事」について「対談」する場合は、その交渉の席に遠藤高

康か、または関和見備後守か宗綱を参加させるのが良いと政宗は述べている(【表】No.33)。大崎領と直接境を接する遠藤高康とともに、宗綱も交渉の実務に携わる可能性があったのであり、当時の宗綱の位置がうかがわれる。

結局、大崎義隆は政宗に従属することになったが、ほどなく小田原合戦・奥羽仕置を迎えることになる。同十八年段階の宗綱の動向は不明だが、翌十九年に再び登場する。政宗は上洛して秀吉に謁見するが、宗綱らは政宗のもとへ使者を派遣している。それへの返信として、同年三月五日に前掲【史料5】が出され、宗綱と養父周防守・嫡子助三郎に対して、大崎・葛西に対する仕置を秀吉から命じられたので、近日中に下国することを伝えている。詳しくは原田宗時が申すとしているので、宗時は高城氏に対する「指南」だった可能性もあろう。

その後、大崎・葛西一揆討伐が本格化する直前の六月一日時点で、宗綱は宮沢元実とともに某城(名生城(宮城県大崎市V)か)に在城していたようである。両者に対して政宗は、敵対する葛岡氏の一類が逃げてきた場合は討ち取り、その主家であった宮沢城(同)主岩崎讚岐守の足弱などを保護するよう命じている(【表】No.36)。以上、高城宗綱の動向を可能な限り追ってきた。留守政景や遠藤高康、宮沢元実、長江月鑑斎ら近隣領主と行動を共にすることが多かったといえるが、こうした点からも、宮城・松山・大松沢・深谷といった地域間の繋がりは根強く、伊達氏としても一体的な地域として把握していた側面があったと考えられ、そのなかで宗綱は活動

していたのである。

(註71) 『水沢市史』二 中世、七六九～七七七頁。

(註72) 『水沢市史』二 中世、七六七・七八頁では、この「宮城」は名字ではなく、留守氏そのものを指して「宮城」と表現しているだけであるとして、宗綱が宮城氏を名乗ったのではないとしている。

(註73) 前掲注(50)。

(註74) 『町誌』五二七頁・五九〇頁を参照。

(註75) 前掲注(58) で見たように、「伊達日記」では宗綱ではなく周防守が出陣メンバーに名を連ねているが、一次史料では宗綱しか確認できない。ただ、【史料5】との関係からも、周防守もいまだ諸方面で活動していた可能性がある。

第六章 近世初頭の高城地域

本章では、第一章で指摘した課題のうち③について、主として天正十八年から慶長末期までを範囲として検討したい。この時期についての検討は非常に少ないが、史料は比較的多く残されている。まずは、近世初頭の高城地域を支配した領主層について検討したい。

天正十九年六月までは明確にその動向を確認できる高城宗綱であるが、その後は突如として史料上に登場しなくなる。あるいはほとんど没したのだろうか。もつとも、宗綱の子宗直は、慶長七年(一六〇二)に磐井郡折壁に移封されるまで高城地域を所領としていたとされるので、高城氏自体はそのまま高城地域に居続けたと考えられるが、急激にその存在感を失ったこと自体は間違いない。留守政

景も、利府を没収されて黒川郡大谷(同大郷町)、さらに磐井郡黄海(岩手県一関市)へ転封された形跡があるので、高城氏も所領の削減などがあつたのかもしれない。⁽⁷⁶⁾

一方、同年には新たに葛西晴胤の次男胤重の子である重俊(流斎)が伊達氏の家臣となり、幡谷村と竹谷村に一〇〇貫文の所領を与えられ、幡谷村に住居している。⁽⁷⁷⁾ 同じく葛西氏の重臣で伊達氏との取次であつた赤井備中守景綱も、同時期に幡谷村に所領を与えられたと思われる。このうち、重俊の所領は二男俊信が引き継いだ、文祿六年(慶長元年、一五九七)に桃生郡飯野川(宮城県石巻市)へ一三貫文で転封されたという。⁽⁷⁸⁾ 赤井氏は、近世を通じて幡谷郷を所領とした。さらに、何度も取り上げている手樽村・長田村を対象とした「奥州高城御棒打水帳」が天正十九年に作成されている。先述したように、これら諸村は、戦国期段階から高城氏ではなく伊達氏の直轄領ないし給人の所領となつてきた可能性がある。

文祿期は史料がなく不明だが、慶長期になると再度増加する。慶長五年十一月十七日付けの「山岡重長以下人数書」【表】No.41)には、「一、湯村信濃守 宮城・黒川・高城 佐瀬助右衛門尉」とある。この史料自体が難解なものなのだが、伊達氏重臣湯村親元が高城地域に所領を有していたというよりも、宮城・黒川・高城の軍勢を率いる寄親的な立場であつたといえようか。湯村と佐瀬との関係も不明であるが、高城氏のほかに高城地域に給人が複数存在していた可能性があらう。同年には「葛西大崎船止日記」【漆請取日記】【表】No.39・40)という高城地域が登場する史料が残されているものの、

いずれも性格が不明瞭かつ難解であり、位置付けが難しい⁽⁷⁹⁾。

同七年に高城氏が転封されてからの状況もまた不明瞭だが、同十七年には一つの画期を迎える。一二〇〇石で岩出山にいた伊達氏重臣山岡重長が、高城郷に一八〇〇石を増され、翌十八年には高城へ移住したのである⁽⁸⁰⁾。先述したように、重長の屋敷は蛇ヶ崎にあったことがわかっているが、その石高といい、高城地域の大部分が山岡氏の所領となったものと思われる。なお、山岡氏は寛永十八年(一六四一)に途絶えてしまい、高城地域から去ることになる。

以上がおおよその領主の変遷であるが、これを踏まえて、一次史料から近世初頭の高城地域の姿を明らかにしていきたい。まず注目したいのが、磯崎である。そもそも磯崎という地名の由来は、『願立寺縁起』の記述から、願立寺の開基で大坂の陣の牢人である磯崎豊前守にあるとされているが、実際はどうなのだろうか⁽⁸¹⁾。

【史料9】(表) No.38)

こうふんの内、与五うらより俵物うんそうの舟 一ゆりあけ

一かはさき 一しほ釜 一いそ崎

右の四ヶ所間より、かせ次第、一月二一そうつつ、さういなく、

可相廻者也、

天正廿年十一月十日御判

丸之内二唐
獅子、指渡
一寸余

与五浦

伊達政宗の朱印状の写しである。意味がよく読み取れない部分もあるが、横浦(宮城県女川町)からの俵物運送の船が、閑上(同名取市)、蒲崎(同岩沼市)、塩釜(同塩竈市)、そして磯崎の四ヶ所

との間を、風次第に毎月一艘ずつ航行することを許可したものである⁽⁸²⁾。

ここで重要なことは、天正二十年(文禄元年)時点で磯崎という地名が存在しており、すでに港として機能していたことである。本史料と次掲の史料によって、磯崎が大坂の陣以後に名付けられた地名であることは、明確に否定される。そして、本史料および伝承ではあるが宝船寺の開山年代も踏まえると、磯崎の港としての機能は、戦国期にまで遡る可能性が高いことも指摘できよう。

おそらく、横浦を含めた五ヶ所の港には、伊達氏の直轄領が設定されていたのではないかと思われる⁽⁸³⁾。磯崎は、上記検地帳が残された長田村の一部ないし隣接地であることも踏まえると、高城氏と深い関係にあるとともに、戦国期段階ですでに伊達氏の直轄地が設定され、海運の拠点として整備されつつあったことが想定される。

そうした磯崎の姿がより明確になるのが、次の史料である。

【史料10】(表) No.42)

此度又左衛門殿御下向候、然者宗是御知行俵物、如去年磯崎二而、可有御渡にて候、慥成奉行申付、懇に請とらせ、いかほと、書付を可為相上候、此方二而金子遣候筈にて候、又当年気仙に而、米之うりかい如何様二候哉、可申上候者也、仍如件、慶長七年

二月廿八日(黒印)

茂庭石見とのへ

湯村信濃とのへ

伊達政宗が、重臣の茂庭綱元・湯村親元に宛てた黒印状である。文中の「宗是」とは元豊臣秀吉の家臣の和久宗是、「又左衛門殿」はその長男宗昨である。これによると、おそらく遠方にいた和久宗昨が仙台方面にやってくるので、父宗是の知行地から徴収した俵物を、去年のように磯崎において宗昨に渡すようにと命じている。また、きちんとした奉行に命じて宗昨に受け取らせた後、その内訳・分量を記した文書を仙台に送るようにと述べているが、仙台においてその分の金子を宗昨に渡すためだとしている。

実は、和久宗是は一時期政宗のもとへ身を寄せており、慶長十七年以降に史料上に頻出する。ところが、大坂の陣が起きると豊臣方として大坂城に籠城し、八十一歳にして奮戦・戦死してしまった。その子孫は、仙台藩士として続いているため、『伊達世臣家譜』などに和久氏は立項されている。『伊達世臣家譜』には、「秀吉薨之後、貞山公聞宗是之武名招之、慶長十七年給田二千石、住于黒川郡大谷邑」とあり、秀吉死後に政宗に仕え、慶長十七年に所領を与えられたとしている⁽⁸⁵⁾。しかし、本史料は慶長七年であるため、齟齬をきたしている。

この点に関して、黒川郡大谷保で活動していた仙台藩山守の家に伝わった「残間家文書」に、興味深い記述がある。年月日未詳「御林境御尋御座候間申上候事」には、板谷御林が宗是の所領で、「和久ノ宗是御知行ニ八ヶ村ハ山谷地共ニ被御申請、御林へハ横目被相付、弥きふく御はやし被成候得共、慶長九年ニ御上地ニ罷成候ニ付」とあり、寛文十三年（一六七三）六月十七日付けの「乍恐書物を以

申上候御事」には「慶長元年今同八年迄、和久野惣清様御知行被成置候、同九年今御蔵入ニ罷成候」とある⁽⁸⁶⁾。ここから、宗是は慶長元年には政宗に仕えており、同八年まで大谷保の一部を所領としていたことがわかり、年代的にも本史料と一致するため、事実である可能性が高い。

以上のことを踏まえて、ここでは磯崎が登場することに注目したい。大谷保の宗是の所領から上がってくる「俵物」が磯崎に送られ、おそらく磯崎へ宗昨自身が赴いて受け取っているのである。「去年の如く」とあるが、同六年付けの政宗重判状には、やはり宗昨に対して「代物四十三貫三百八十八文」が「米三百六十八石八斗壹合三勺之代」として与えられていることが確認できることから、そのことを指すのだろう。宗昨は元来病弱で家を継がなかったこともあり、父宗是が金銭的な援助をしていたのだろうか。それはともかく、大谷保から「俵物」が磯崎に運ばれていることがわかる。磯崎は、近世において黒川郡や宮城郡の米が集積される場所で、仙台藩の磯崎御蔵が置かれていたわけだが、この段階ですでに同様の関係・構造が成立していたことが判明するのである。

続く同十年九月二十六日付け伊達政宗黒印状（表）^{【表】} No.44）の内容も注目される。これは、仙台藩領における浄土真宗寺院の筆頭である正楽寺に伝わった文書で、領内の「本願寺門徒衆」からおそらく上方の本願寺へ納入する塩硝役代二貫五百文を、正楽寺がとりまとめて送ることを認めたものと思われる。このなかに、「いそさき豊前守」との記述があるのである。浄土真宗の教線が磯崎にも及ん

でいたことがわかるが、ここで思い出されるのが、先述した願立寺の開基で磯崎の地名の由来となったとされてきた「磯崎豊前守」である。本史料に登場する「豊前守」は、まさにこの人物のことを指すのだろう。「いそざき」はあくまで地名で、苗字ではないことにも注意したい。ここから、大坂の陣とは無関係に、すでに慶長十年段階で「豊前守」なる人物が磯崎におり、彼を中心に浄土真宗の活動が行われていたことがわかる⁽⁸⁸⁾。そして、願立寺は正楽寺の末寺であることから、その延長線上に願立寺の建立がなされたものと考えられよう⁽⁸⁹⁾。

こうした磯崎の港・町としての姿がはっきりしてくるなかで、高城宿も史料上に登場するようになる。

【史料11】〔表〕 No.48

伝馬五疋、無異議可相立者也、但須江六郎衛門二疋疋、窪田内記二疋疋、松川大学二疋疋借置者也、仍如件、

慶長拾三年

八月四日

御墨判

仙台今高城迄上下

本史料は、高城宿が史料上に登場する初見のものである。仙台から高城まで伝馬五疋を相違なく出すよう命じる、典型的な伝馬手形である。須江・窪田・松川は政宗の家臣で、内政において諸方面で活動している⁽⁹⁰⁾。本史料が出された背景は不明だが、ここから高城宿は、すでにこの段階で伝馬役を負担する宿場町として成立していたことがわかる。

【史料12】〔表〕 No.52

伝馬七疋、安斎はやと二可相立候、たま山へ代物式百五十貫文遣用、下はかり也、仍如件、

慶長十七年

九月十四日(黒印)

仙台今はらの町、りふ、高城、ふかや、ぬ

か塚、かん取、寺崎、柳津、ひねうし、ま

いや、大いぬ川原、つや、大や、けせ沼、

気仙中

【史料11】から四年後の伝馬手形である。「たま山」＝玉山金山へ代物を運ぶため安斎隼人に与えたもので、下りのみという条件付きである。仙台から原の町、利府、高城、深谷(小野)を経由して、玉山金山がある気仙(岩手県陸前高田市)までの経路が詳細に記されている。深谷までは、まさに近世の石巻街道の道筋で、この時点で成立していたことが明確となる。この頃は、仙台と遠島(牡鹿半島)・気仙方面(玉山金山など)との繋がりが深くなっており、それとの関係で街道が整備され、高城は宿場町としての発展を遂げていったものと思われる⁽⁹¹⁾。

こうした磯崎・高城宿の成立・発展は、仙台築城・城下町整備、諸寺社の造営・修築を中心とした、慶長年間の一連の事業との関係が考えられよう。関ヶ原の戦い後、政宗が内政に力を注いでいることは知られており、荒れ地の開発を推進し、交通網・宿場町・港の整備も同時に実施していた。なかでも、隣接する「松島」において

瑞巖寺の建立が一大事業として進められた影響は大きかったと思われる。高城宿・磯崎の成立・発展は、こうした領国構造の再編の一環として位置づけられよう。慶長十七年の山岡重長の高城入部も、重要性を増していった松島高城地域だからこそ起きた現象だったといえるのではなからうか。

(註76) これに関連して、『伊達世臣家譜』では、時期・理由は不明ながら、宗直の代に三〇〇石から三六〇石へ減封されたとしている(『仙台叢書 伊達世臣家譜』第一巻、第一輯一〇七頁(卷之四))。

(註77) 『葛西家譜書出控』(『石巻の歴史』第八巻古代・中世編、五一四号)。(註78) 前掲注(15) 六六頁。

(註79) 『葛西大崎船止日記』には「はつはらの内 一ふねぞう」とあり、高城地域の初原に比定されることが多いが、初原を流れる桜川は小川であるため、場所比定に疑問が残る。「漆請取日記」は十月五日付で、「一国分中 一ミヤキ中 一高城中 一ふかや中 一松山中 一大松さは中 右此うるし卅はい」を「草刈ないせん 新藤藏人」の両名が「い、ふち馬助殿」に宛てて提出している。なお、「葛西大崎船止日記」については、前掲注(7) 入間田論文、渡辺信夫「前近代の産業・交通」(『石巻の歴史』第五巻、一九九六年)などを参照。

(註80) 『岩出山町史』通史編上巻、三〇五頁。なお、『伊達世臣家譜』では「城地」および「三千石」が「高城郷」で与えられたと(『仙臺叢書 伊達世臣家譜』第一巻、宝文堂、第二輯一九〇頁)、『貞山公治家記録』では「宮城郡高木邑ニ於テ百八十貫文ノ地ヲ加増セラル。本地都合三百貫文ノ高二成下サル」とある(『仙台藩史料大成 伊達治家記録』二、宝文堂、五七三頁)。

(註81) 『磯崎村』(『日本歴史地名大系 宮城県』二五〇頁)。前掲注(6) 『松島町歴史文化基本構想』一七頁。
(註82) 本史料については、これまで大きく二つの解釈が提示されている。

入間田宣夫「中世の民衆生活」(『石巻の歴史』第一巻通史編(上)、一九九六年。六〇五、六二〇・二二頁)では、この文書は横浦の有力者である木村上総に宛てたもので、政宗が朝鮮出兵にともない肥前名護屋に在陣していた頃のものであること、文禄年間に牡鹿郡の阿部十郎兵衛率いる四十八艘が朝鮮出兵のため動員され「宮城郡高城村磯崎濱」から出発したという「安永風土記」の記載(『牡鹿郡陸方門脇村慶学院書出』『宮城県史』第二六巻、二五八頁)などから、四ヶ所の港から名護屋まで兵糧米を運ぶことを命じたものであるとしている。一方、渡辺信夫「港町石巻の成立」(『石巻の歴史』第二巻通史編(下の一)、一九九八年、六二・六三頁)では、冒頭の「こうふんの内与五うら」を「五部浦のうち横浦」とし、横浦と四ヶ所の港との間をそれぞれ月一艘ずつ航海することを許可するものと解釈している。またあくまで仙台・石巻湾の内湾海運に関する史料であり、朝鮮出兵とは直接結びつかないとしている(渡辺氏執筆による『仙台市史』通史編三近世一(二〇〇一年、三二三頁)も同様である)。筆者も、後者の説に賛同する。

(註83) このうち関上は、文禄五年段階で直轄領が設定されていたことが確実である(「名取高柳之内北方ゆりあけ浜名寄帳」『宮城県史』第三〇巻所収、伊達家文書)。

(註84) 『伊達世臣家譜 卷之六』(『仙台叢書 伊達世臣家譜』第一巻、一六九頁)。

(註85) 『御林境御尋御座候間申上候事』(『大郷町史』史料編二、二号、残間家文書)。

(註86) 『乍恐書物を以申上候御事』(『大郷町史』史料編二、九号、残間家文書)。

(註87) 『伊達政宗代物渡方重判状』(『仙台市史 伊達政宗文書』八以下『仙台』と略す)一五二号、天理図書館所蔵伊達家文書)。

(註88) なお、同史料には「おの、豊前守」ともあり、この「豊前守」は磯崎の「豊前守」と同一人物だろう。「おの」は、深谷保小野の可能性が高く、豊前守は高城地域と小野の双方に影響力を持っていた人

物と思われる。

(註89) その後、磯崎は寛永六年に浜中田地の役や船役の免除を受けており
〔表〕No.59・60)、同九年には「肝煎」も見られるようになる〔表〕
No.61)。

(註90) 同時期だと、「伊達政宗黒印状」(「仙伊」一二四一号、桜井寛氏所蔵
文書、「伊達政宗黒印状」(「仙伊」一二六三号、『引証記』二十一)
に須江・松川が登場している。

(註91) なお、この間の慶長十六年十月二十八日には慶長地震津波が発生し、
仙台藩領内でも大きな被害が出たことがわかっているが、松島地域
については被害の状況を記した史料はなく、大きな影響はなかった
ものと考えられる。

おわりに

本稿で明らかにした重要な点は、以下のようなだろうか。すなわ
ち、①相馬氏が撤退した十五世紀初頭以後の高城地域には大松沢の
宮沢氏が進出し、十六世紀前半までその姿が確認できること、②町
内最大の館山館は、宮沢氏が深く関係していた可能性が高いこと、
③高城氏は十五世紀半ば頃には氏族として成立していた可能性があ
り、近隣の黒川氏や長江氏と深い関係にあったようであること、④
天文期頃の高城地域は、伊達方諸氏の所領が分散・錯綜していたよ
うであること、⑤戦国期段階ですでに磯崎は港として機能していた
可能性が高く、文禄・慶長期にはすでに周辺地域からの物資の集散
地となっていた様子がうかがえること、⑥高城宿が史料上に初めて
登場するのは慶長十三年であり、石巻街道の整備や磯崎の発展と軌

を一にしていたことが考えられること、⑦これらのことから、近世
の高城地域の基本構造は慶長期段階に成立した可能性が高いこと、
⑧それは、仙台築城・瑞巖寺の建立をはじめとした領国全体にわた
る地域構造の再編の一環と位置づけられること、⑨中世から近世に
かけて、陸地化の進行などを背景に、地域の重心が北部から南部へ
徐々に移っていったようであること、などである。

松島高城地域は、文献史料には比較的恵まれた地域であるが、や
はり考古学的な情報が決定的に不足しており、特に空間構造の検討
では推測が多くなってしまう。また、隣接する一大霊場「松島」
との関係をどのように捉えるのかという点についても、不十分な検
討に終わってしまった。いずれも後考に譲りたい。

前稿で検討した利府地域は、主要道の変遷と、それにもなう地
域の性格の変化がよくみえる事例であった。また、そうした変化は
戦国末期から慶長期にかけて徐々に起きていったことを指摘した。
松島高城地域では、大幅な街道の変遷こそなかったものの、戦国末
期から慶長期にかけて変化していく様子は同様であったといえよ
う。もっとも、利府地域よりは時期的にやや下って大きな変化が起
きていたようであり、そこに地域の変化の多様性を見出すことがで
きるのではなからうか。

また、奥羽仕置はたしかに一つの画期ではあるが、それによって
地域の構造が一挙に変化したのではないといえそうである。その前
の戦国末期の情勢や、特にその後の仙台築城を始めとした領国再編
の影響の大きさが改めて浮かび上がってきたのではなからうか。そ

うした意味でも、特に慶長期は仙台周辺地域の中近世移行期の地域史を考えるうえで重要な時期と考える。今後とも検討を積み重ねていきたい。

〔謝辞〕

松島町教育委員会の森田義史氏・米城百合子氏には、調査研究のさまざまな面で大変お世話になった。また、貴重な赤色立体地図の掲載にあたっては、田中則和氏のご紹介で谷口宏充氏（東北大学東北アジア研究センター名誉教授）からご快諾を得た。記して拝謝する。

〔付記〕

本稿は、二〇一七～一九年度竹井ゼミ（『日本史総合演習Ⅰ・Ⅱ』）の研究活動の成果の一部である。また、科学研究費補助金基盤研究（B）「東北太平洋沿岸地域の歴史学・考古学的総合研究」（代表…七海雅人）の研究成果の一部でもある。

〔追記〕

原稿提出後、佐藤貴浩「戦国大名伊達氏の家督相続」（久保田昌希編『戦国・織豊期と地方史研究』岩田書院、二〇二〇年）を得た。そこでは、本稿【史料8】の年代を永禄八年に比定しており、注目される。現時点で筆者は判断を下せないが、仮にそうだとすると、【史料7】の年代、さらには留守政景や高城宗綱の動向自体を根本

的に再検討する必要が生じる。後考に譲りたい。